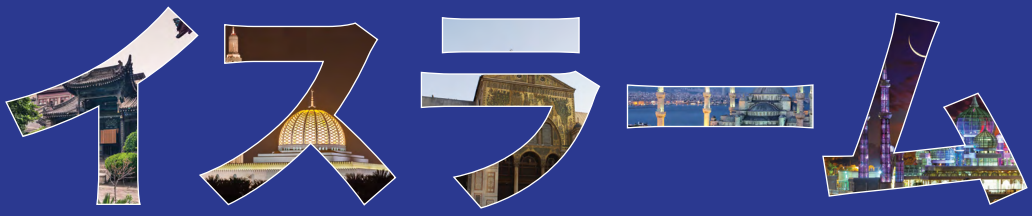


とは?

イスラームの教え、価値観、歴史の概略

万民への警告者とするために、かれのしもべに識別を下された方に祝福あれ。

聖クルアーン第25章1節

イスラームとは

イスラームの教え、価値観、歴史の概略

第3版ヒジュラ歴1440年ジュマーダッ＝サーニー /2019年2月

無断転載禁止

イスラミック・インフォメーション・センターは、万人のイスラム教に対する理解を深める目的で本書を世界各国各言語で出版することを許可する。**ただし**、一切の金銭の支払いは受け取らないものとし、商業目的で販売等してはならない。

著・出版

イスラミック・インフォメーション・センター
マスカット　スルタン・カブース・グランド・モスク
オマーン国
Fax：(968) 2450 5170
www.iicoman.om

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名
において

目次

章 **ページ**

はじめに 1
1. 歴史の中のイスラーム教 2
2. イスラームの意味と基本教義 8
3. 創造主アッラーを形容する性格と属性 19
4. 預言者ムハンマド～その生涯と人物像～ 21
5. 預言者の信憑性 24
6. クルアーンの歴史と内容 30
7. クルアーンの信憑性 39
8. 預言者の慣行 42
9. 死後の世界 44
10. 他の宗教に対するイスラーム教の考え 49
11. イスラーム教におけるイエス 52
12. イスラーム教の正しさ 55
13. 無神論と不可知論に対する訓戒 57
14. イスラーム教における女性の地位 61
15. 過激主義と暴力 62
16. イスラーム教における「ジハード」 64
17. イスラーム法「シャリーア」 66
18. イスラーム教諸派 68
19. イスラーム教における基本的人権 70
20. イスラーム教における文化の多様性 74
21. 宗教の大切さ 78
22. ムスリムになるには 80

用語集 82

注釈 84

参考資料 88

はじめに

アッラーは、アッラーに仕えアッラーの定める戒律に従って生きるべく人間をお創りになられました。その目的を達するため、「神の意思への服従・帰依」（イスラーム）という宗教をお創りになり、預言者を立てて天啓を授け、この宗教へと人類を導かんとされました。つまり、全ての人はこの絶対唯一の神の宗教について知る権利があり、信仰に関して理解した上で選択する機会が与えられているのです。しかし、その始まりから、イスラーム教はこの宗教に批判的な者たちによりそのイメージを歪められ、その結果長らく誤解されてきました。この誤ったイメージが、「神とは何か」「自分は何のために生きているのか」という精神的世界の真理を追い求める人の障壁となっているのです。また、今日イスラーム教についていわゆる「専門家」が示すものは、例外もあれど、大部分が様々な偏見や先入観にまみれています。イスラーム教は、他の宗教以上に欧米でこぞって本などに書かれていますが、同時にこれほどまでにマイナスで誤ったイメージを植え付けるような表現・評価をされているのもイスラーム教くらいです。ここ10年ほどでイスラーム教に関する著書は増えているものの、真実、そして過激思想ではなく相互理解を生もうという意志に基づいて書かれた本当に正しいイスラーム教についての書籍は数少ないのです。

この本は、この偉大な宗教をわかりやすく説明して偏見や誤解を解き、ありとあらゆる人に本来のイスラーム教について正しく知ってもらい、正しい信仰の道へと導くことを目的としています。信仰は文化に根差すところが大きく、知識をもってのみ、真実を見いだすことができるのです。

歴史の中のイスラーム教

イスラーム教は一宗教であると同時にひとつの文明でもあります。1400年にわたる歴史を持ち、世界の大陸を股にかけて広まった史実なのです。その教えは、世界の文明、特に西欧文明のある側面の発展において重要な役割を果たした、目に見えない精神世界の現実として受け止められているものでもあり、地球上の多くの人々の人生を内側・外側両方から変えてきました。今日、20億人近い様々な人種、民族、文化的ルーツを持つ人がイスラーム教を信仰しています。イスラーム教は今日の社会で大きな存在感を持つだけでなく、その影響力は欧米、アジア、そしてアフリカではっきりと見て取れます。だからこそ、現代の人々の在り方について考えたり、西欧思想史・文化史に関心があったり、また宗教の実態とその精神性に惹かれていたりする場合、イスラーム教について知っていることは非常に重要となってくるのです。

イスラーム教を理解するにあたり、「ウンマ」というイスラーム社会を構成するムスリム共同体の概念の重要性に対する理解無くしては始まりません。ウンマはひとつで、絶対唯一の主が授けられたクルアーンの啓示、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ[1]）が神の使者であること、そしてイスラム聖法シャリーアへの信奉のもとに結束しています。ムスリムは強い同志愛で結ばれており、一部のムスリム地域の間に争いを巻き起こした多くの混乱にも関わらず、この絆は今日も変わらず強く残っています。ムスリムは、今でこそひとつの国を築くなど政治的まとまりを見せてはいませんが、それでもひとつの宗教的共同体なのです。世界のどの人種・民族集団を見ても、その中からイスラームのウンマに属すイスラーム教徒がいない集団はほとんどありません。イスラーム教はその始まりからありとあらゆる人を対象としてきた宗教であり、いかなる人種主義、排他主義、民族主義にも強く反対してきました。イスラームのウンマは、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、そしてオーストラリアと、世界中に広がり、あらゆる人種・民族

集団から構成されているのです。

イスラーム教の歴史は、イスラーム社会、組織、そしてイスラーム文化が花開いた文明の歴史と切っても切り離せない関係にあります。預言者がメッカからメディナへ遷都したことにより、メディナで世界初のイスラーム社会が形成されましたが、この聖遷から預言者の死後4代の正統カリフによる統治の時代（西暦622〜661年）は、イスラーム教の歴史の中でも特異な時代を成しています。この時期は理想の時代であり、後世にわたりムスリムが導きを求めて常に振り返ってきた時代です。

4代にわたった正統カリフ時代に続く後継者はダマスカスを中心とする巨大な帝国を築き上げましたが、正しく導かれた預言者の後継者（カリフ）による治世を世襲制の王朝へと変貌させてしまいました。初代イスラーム王朝であるウマイヤ朝の統治は中央アジアから西はスペイン、フランスにまで及び、通信、行政、さらに法、軍の制度まで整備されました。その制度の多くが何世紀にもわたり受

スペイン・グラナダのアルハンブラ宮殿

け継がれ、ウマイヤ朝歴代の支配地域において公共行政や商業、農業、郵便に関する数々の改革が行われて発展していきました。ウマイヤ朝は全盛期を迎え、アラビア語をムスリム世界の共通言語にするという歴史的決断をし、自国の金・銀貨を鋳造し単一通貨を導入しました。　ダマスカスのウマイヤド・モスクやエルサレムの岩のドームなどは、ウマイヤ朝の繁栄と功績を伝える重要な建築物の代表格です。

西暦750年、アッバース朝がウマイヤ朝を打倒し、イスラーム帝国の首都を新都バグダードに移しました。アッバース朝の統治時代、イスラーム文明は隆盛を極めます。アッバース朝のカリフは代々芸術、科学、哲学を手厚く保護しており、イスラム科学と哲学が花開いたのもこの時代でした。アッバース朝は古代ギリシア・ローマに匹敵する知的文化を作り上げたのです。時が流れるにつれ、バグダードに集められていた権威は分散化して独立した権力と学問の拠点となり、ムスリム世界各地で教育・研究機関が乱立し互いにしのぎを削りました。世界中から知識を求めやってきた学問の徒がバグダードやダマスカス、ブカラ、カイロ、フェズ、コルドバ、シラズなどの拠点で学び、アル＝キンディー、アル=ファーラービー、イブン・スィーナー、イブン・ルシュド、イブン・アル＝ハイサム、アル＝ビールーニー、アル＝フワーリズミーなど、多くの博学者が新しい考えをもたらし活躍しました。哲学、天文学、医薬学、数学、さらに科学全般における研究活動の大部分はムスリム世界で展開され、当時学者達の間で共通語であったアラビア語で行われていました。ちょうどこの時期に、ウマイヤ朝時代に取り組み始めたイスラーム法（シャリーア）の成文化が完了し、スンニ派、シーア派、イバーディー派という今日存在する3つの既存の法学諸派が成立しました。ブハーリー、ムスリムなどの編纂によるハディース正典が確立されたのもこの時期です。 9〜10世紀のムスリム統治下のバグダードとコルドバは世界を驚かせた偉大な都市でした。世界で最も進んだ文明都市であり、知識人、文化人がこぞって訪れました。フランスやイギ

リス、イタリアの王でさえ、相談役、医師、建築士、はたまた楽士や仕立て屋でも専門家を呼ぶ際はバグダードやコルドバで探したほどです。ムスリム都市には石造りの家屋や宮殿が立ち並び、舗装され街灯のついた道が整備され、水道設備があり、大学や図書館、病院・薬局、美術館、さらには公共浴場も整っていました。中世に生きたムスリムはすでに、石鹸や化粧品、香水といった、今日でこそ普通ですが、当時では先進的な身だしなみケア用品を日常的に使用していました。アッバース朝はまさに、科学・技術革新、高度な生活水準と現代的な社会といった点でムスリムの「黄金時代」といえます。

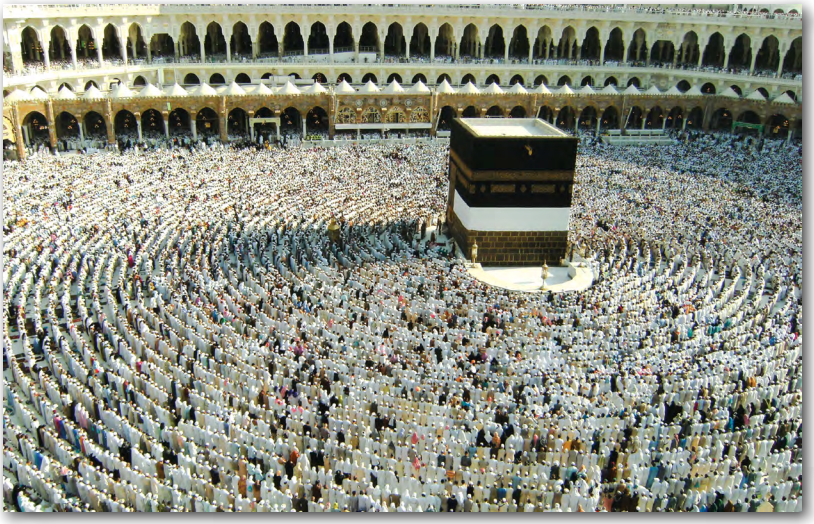
しかし、次第にアッバース朝の力も衰退し、西暦1517年にオスマン軍に敗れ、その栄華にも終止符が打たれました。オスマン帝国は「壮麗帝」スレイマン1世（スレイマン大帝）の治世で繁栄を極め、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）の築いた都市コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）から帝国を治めたスレイマン1世は、存命

トルコ・イスタンブールのスレイマニエ・モスク内部

中にシリア全土、エジプト、北アフリカ、アラビア半島、さらに東欧の数多くの地域をその支配下に置きました。オスマン帝国の歴代スルタンは、同時代のどの国にも類を見ない優れた官僚制度をもって巨大な大帝国を治めましたが、帝国内の多様性をひとつの文化に無理矢理当てはめようとはせず、非常に寛容で多元主義者でした。オスマン朝では、様々な集団が独自の信仰、文化、法律、それぞれの仲間や指導者への忠誠に従いながら平和に共存できる枠組みがもたらされました。オスマン帝国の君主は息の長い優れた帝国を築き上げることに成功し、帝国は6世紀もの長きにわたり存続したのです。17世紀から20世紀にかけてヨーロッパ諸国の植民地支配が広まり、ムスリムでない商人や宣教師、兵士、植民地行政官がムスリムが住んでいた土地のほとんどを支配するようになりました。ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランスも皆植民地帝国を建設し、中国とロシアに至ってもムスリムが人口の多くを占める地域でその領土を拡大していきました。このような異国の支配は多くのムスリムにとって屈辱的であっただけでなく、ヨーロッパの統治者が伝統的なムスリムの教育機関、法機関、さらに行政機関までも西洋化したためイスラーム社会の根幹を揺るがすものでもありました。ヨーロッパ人はキリスト教の影響を受けた、世俗的、物質主義的文化の価値観を優先させ、ムスリム地域に根差す宗教的価値観をおろそかにしたのです。20世紀初頭、弱体化したオスマン帝国は第一次世界大戦に参戦するも敗戦し、解体されました。オスマン帝国の崩壊後、今日のトルコ共和国が西洋の世俗主義国家をモデルに建国され、かつてのオスマン帝国の属州は独立を手にしたのでした。

世界中に散らばるムスリムの大半は現代でも、その長く受け継がれてきた価値観に対する中傷にも関わらずイスラーム教の慣習に則って暮らしています。今日のイスラーム教を理解するにはまず、様々な宗教があればその歴史が辿る道もひとつではないということを認識しなくてはなりません。キリスト教では16世紀の宗教改革

を経てプロテスタントが生まれ、ユダヤ教でも保守派と改革派の流れがあります。ですがイスラーム教については、法学的側面においても神学的側面においても、キリスト教やユダヤ教で起こったような改革は未だかつて起こっておらず、また今後も明らかな変化が起こる可能性は低いと考えられます。イスラーム教における宗教生活と意識は、そのほとんどが正統主義的な信仰と伝統的慣習の域を出ないものです。一部のイスラーム社会や世界の一部の地域において顕著に見られる現代主義や「原理主義」といわれる動きにより、イスラーム教の教えに沿った宗教生活は薄れましたが、それでも、預言者の時代や正統カリフ時代に定着した世界観を覆すような神学的、法学的概念は生まれませんでした。ムスリムの大多数が今日でも先人の定めた宗教儀礼と教えを守っており、旧来の解釈に基づくイスラーム教の慣行に合わせた生活リズムで生活しています。それだけでなく、クルアーンやハディース、シャリーアなどを拠り所とする古典的イスラーム科学の追求も、伝統的なイスラーム教育や法制が廃れても以前と変わらず何世紀もの間連綿と続いています。



メッカのカーバ神殿。唯一絶対の神アッラーを崇拝するために地上に建てられた最初の建物。（クルアーン第3章96節）

イスラームの意味と基本教義

「**イスラーム**」という宗教は、具体的に、創造主たるアッラーの他に神はないという、神が唯一絶対のものであることを信じること、そしてアッラーの遣わされた最後の預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に託されたその御意思に対し絶対服従すること、この2点で説明されます。

イスラームとは、自らの意思で心からアッラーの御意思に従い、心の平穏を手に入れることなのです。アッラーの御意思への帰服とは、創造主たるアッラーに対する畏怖の念を持ち、アッラーを崇拝し、アッラーに帰依することであり、この3つが揃ったときにこそ、神の御許に安らぎを得て、自分自身や生きとし生けるもの、自分を取り巻く周囲とも平和な関係を築くことができるのです。イスラーム教を信奉し、唯一絶対の神を信じその御意思に従う人が「ムスリム」と呼ばれます。

イスラーム教は決して新興宗教ではありません。アダムに始まりノア、アブラハム、イシュマエル、イサク、モーセ、イエス、そして最後の預言者ムハンマド（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）まで、神の遣わされた預言者全員に天啓により示されたものと同じ宗教です。ここに挙げた預言者は、アッラーのみを崇拝しその御意思にのみ従ったことから全員ムスリムに数えられます。[2]同様に、神の預言者のもたらした宗教を信仰した人は皆ムスリムと言えるのです。このアラビア語の「イスラーム」という言葉が持つ本来の意味に基づいて、アッラーはクルアーン第3章19節でこう述べられています。

本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意思に服従、帰依すること）である。

イスラーム教の根幹を成すのは、ムスリムが信ずべき6つの信条と行うべき5つの宗教行為「**六信**（イマーン）**五行**（イスラーム）」です。信仰とは確信をもって信じることであり、宗教行為とはその信仰を実践することに当たります。イスラーム教では、信仰は宗教行為の前提と捉えていますが、それは信仰心があることは主の存在、さらに主だけが崇拝に値する神性を有すること（ウルヒーヤ）、万物を創造し支配すること（ルブービーヤ）、そして生きとし生けるものを主の僕として仕えさせること（ウブーディーヤ）を認めることだからです。

六信

6つの信条は、クルアーンの様々な部分で定められています。[3]例えば、第1の信条についてアッラーは第112章で次のように仰っています。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَٰنِ الرَّحِيمِ

قُلْ هُوَ اللَّهُ أَحَدٌ * اللَّهُ الصَّمَدُ * لَمْ يَلِدْ وَلَمْ يُولَدْ * وَلَمْ يَكُن لَّهُ كُفُوًا أَحَدٌ

言え。「かれはアッラー、唯一なる御方であられる。アッラーは自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない。かれに比べ得る、何ものもない。」

第1の信条

アッラーの他に崇拝に値する神はいないと信じること。アッラーは万物の創造主であらせられ、唯一絶対の存在です。アッラーを形容する属性はアッラー固有のもので不可分であり、いかなるものもアッラーと同列に並べてはなりません。この教義が、一神教論（タウヒード）と言われるものです。

＜この信条の意義＞　①創造主がひとつの存在であることはすなわち万物の創造の目的はひとつであり、宗教はひとつであることを意味し、人生の生き方はひとつであるということになります。多くの人が心の在り方について悩んでいますが、それはこの人生における目的がひとつに調和していないからなのです。②神を形容する特性を他の存在に結びつけると迷信を生み、恐怖や腐敗、搾取につながります。

第2の信条

天使の存在を信念、。かれらはアッラーの使用僕と代理僕であります。人間と違い、天使は霊であり肉体を持ちません。かれらの自然とは、永久にアッラーを崇拝し、アッラーの命令を実行することです。

＜この信条の意義＞　人間の目に見えない存在を信じることは、信仰心を持つことの前提条件のひとつです。また、この信条は、人智の限界を広げて物理的理解を超越した存在を認識できるようにし、精神的世界の理解へつなげるのです。

第3の信条

ダビデに下された『詩篇』（ザブール）、モーセに下された『モーセ五書』（『律法』とも）（タウラー）、イエスに下された『福音書』（インジール）、そしてムハンマドに下された『クルアーン』（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）など、アッラーの使徒に授けられた聖なる諸啓典を信じること。

＜この信条の意義＞　これらの啓典は同じ主からもたらされ、同じ信仰と倫理の基本教義を示したものであり、この信条は論理的に考えて当然のことと言えます。啓典のうちひとつを認めて他を認めないというのは矛盾した考えであり、また主が人類に相異なる内容の教えをお授けになるとは考えられません。クルアーンは、先に下された啓典の内容が正しく真実であることの確証であり、今日において過去の御使いの言葉と思われている人の手で加えられた改ざん点を正す、神の人類への最後の御言葉なのです。

第4の信条

アダムから最後の預言者ムハンマドまで（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）、アッラーの御言葉を伝える使徒全員を信じること。

＜この信条の意義＞　これも第3の信条と同様、当然のことです。預言者達は全員同じ主から遣わされ、基本的に同じ内容の教えを人類に伝えており、預言者のうち1人を認めて他を認めないというのは矛盾しているだけでなく、唯一絶対の神の宗教が分裂することにつながります。

第5の信条

最後の審判の日を信じること。天使と違い、人間には選択の自由が与えられており、自分の意思でアッラーの命に従うか従わないか選べます。ただし、この自由にはアッラーに対する責任が付いてきます。最後の審判の日、自分の現世での選択について責任を問われることになり、正しい選択をしてアッラーの教えに従った人には永遠の楽園が約束され、誤った選択をしてアッラーの教えに従わなかった人には永遠の地獄が待っているのです。

＜この信条の意義＞　この信条の意味するところは、人間にはアッラーに対し責任があり現世での自分の行動について報いを受けるということです。真の正義と永遠の幸せといった人の持つ願望は、最後の審判の日に神の裁きが下ったとき初めて成就するのです。

第6の信条

神の定め、天命を信じること。万物に起こるあらゆる物事は、良いものも悪いものも、そのどちらでもないものでも、アッラーがその無限の叡智でもってあらかじめ定められた摂理と定命（カザ　ワガダル）に従って起こります。創造物はすべて、物理的世界・精神的世界両方の理と、それぞれに定められた分限によりアッラーの支配下、管理下にあります。それだけに留まらず、アッラーはお定めになった摂理と定命をもってすべてを統べるだけでなく、すべてをご存知なのです。アッラーは時空を超えた知識をお持ちであり、過去、現在、そして未来のあらゆる出来事を記録されています。クル

アーン第6章59節には次のようにあります。

幽玄界の鍵はかれの御許にあり、かれの外には誰もこれを知らない。かれは陸と海にある凡てのものを知っておられる。一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに落ちることはなく、また大地の暗闇の中の一粒の穀物でも、生気があるのか、または枯れているのか、明瞭な天の書の中にないものはないのである。

アッラーの完全なる叡智には、人の一生も含まれており、人がどんな行動を取るか事前に知っておられます。かといって、アッラーが知っておられることで人がその行動を取るよう強制されるわけではありません。ちょうど、天文学者がその科学的知識を働かせて、日食が起こることを何年も前に予見し記録しておくのと同じことです。日食は天文学者らが知っていたから起こるのでもなく、予見されたから起こるのでもありません。これと同じで、時空を超越した無限の叡智を持ち得るアッラーは人が何をするかご存知でその行動を記録なさっていますが、それによりその行動をとるよう強いられることではないのです。

つまり、天命は人間に与えられた選択の自由を否定するものではないということです。人間の選択は常にアッラーのお定めになった摂理に倣ったものであり、選択の結果は天の定めた分限にかなっており、アッラーが事前に自分の選択や行動をご存知であっても自分の選択について責任を負う、というだけなのです[4]。さらに言えば、人間はその選択と行動を行う主体ではありますが、選択を創る力は持ち合わせていません。

本当にアッラーは、あなたがたを創り、またあなたがたが、造るものをも（創られる）。
（クルアーン第37章96節）

これはすなわち、人間の持つ選択の自由について、アッラーは「人

間の意思」を「神の意思」、つまり人間の行動に関して天が一定のきっかけを与えることの前提となさっているということです。言い換えれば、人がある行動を望み、アッラーがそれを果たすのです（アッラーが果たそうとお決めになった場合）。このように、「人間の意思」はアッラーの「神の意思」の中で働くのです。善であれ悪であれ、それらを創り出す能力はアッラーがお持ちですが、悪は人間のとった選択の結果、人間が自分自身の意思を働かせていなかったり誤った方向へ働かせてしまったりした結果である、と言えるでしょう。アッラーが行為とその結果をお創りになるのです。

あなたに訪れるどんな幸福も、アッラーからであり、あなたに起こるどんな災厄も、あなた自身からである。（クルアーン第4章79節）

アッラーの視点では、悪を創り出したり悪を許したりすること自体は悪ではありませんが、悪を選ぶことは悪なのです。そして悪を選ぶのは神ではなく、人間なのです。

＜この信条の意義＞　創造主たるアッラーが万物を統べ完全支配していることを信じることで、アッラーが万物に対し支配権を持つ至高の存在であることを確信できます。アッラーはその創りたもうたものに慈悲深く慈愛あまねくお方であり、この信条は神を信じる者の心を励まし、希望と心の平穏をもたらしてくれます。

これら六信は、人智を超えて精神的世界の理解を深めるだけでなく、「信じる者」とは何たるかを定めています。預言者のうち1人を信じて他を信じないなど、この六信のうちどれかひとつでも欠けていれば、それは「不信心者」にあたるのです。

礼拝への呼びかけ

アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。

アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。

アッラー以外に崇拝の対象は存在しないとわたしは証言します。

アッラー以外に崇拝の対象は存在しないとわたしは証言します。

ムハンマドはアッラーの使徒であることをわたしは証言します。

ムハンマドはアッラーの使徒であることをわたしは証言します。

礼拝に集え。礼拝に集え。

至福に集え。至福に集え。

アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。

アッラー以外に崇拝の対象は存在しない。

礼拝への呼びかけは、永久の至福への誘いです。アッラーの他に崇拝の対象は存在せず、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はアッラーの使徒であることを常に思い起こさせてくれる合図なのです。

五行

5つの宗教行為は、クルアーンの様々な部分で定められています。[3]例えば、第1の行いについてアッラーは第49章15節で次のように仰っています。

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ ثُمَّ لَمْ يَرْتَابُوا وَجَاهَدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنفُسِهِمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ۚ أُولَٰئِكَ هُمُ الصَّادِقُونَ

本当に信者とは、一途にアッラーとその使徒を信じる者たちで、疑いを持つことなく、アッラーの道のために、財産と生命とを捧げて奮闘努力する者である。これらの者こそ真の信者である。

第1の行い

アッラーの他に崇拝の対象は存在せず、ムハンマドはアッラーの使徒であると、心から宣言すること。この宣言をすることで、主が唯一絶対の存在であること（一神論）とムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がアッラーの最後の使徒であることを信じていると認め、信仰を告白するのです。この行為は「シャハーダ」と呼ばれますが、「シャハーダ」という言葉はアラビア語で証言する、固持する、公然の真実を確立するという意味があります。

信仰告白が済んだら、その信仰の実践としてムスリムには次に挙げる行為を実際に果たす義務が課せられます。

第2の行い

1日5回(夜明け前、昼、午後、日没後、夜)のアッラーに対する礼拝（サラー）。礼拝はアッラーとの直接のコミュニケーションです。自分とアッラーの間には何もありません。礼拝の作法は決まっていますが、アッラーを賛美、称賛し、そしてアッラーへ祈りを捧げます。

＜この行為の意義＞　アッラーは礼拝について、アッラーを思い出しアッラーに対する不服従を防ぐためのものと説明なさっています（クルアーン第20章14節・29章45節）。つまり、1日5回の礼拝をしっかり行うことでアッラーに対する意識（タクワ[6]）を高め、また維持することができるのです。

第3の行い

貧しい人、恵まれない人への喜捨（ザカー）。ムスリムはだれでも、個人的財産のうち、前の年に使わなかった分の2.5%に相当する金品を支払う義務があります。金銭や金・銀での貯蓄だけでなく、農作物や市場株式なども対象です。

＜この行為の意義＞　ザカーの制度があることで富がきちんと社会で分配され、その結果社会における貧困、妬み、負の感情をなくすことにつながります。「ザカー」という言葉には「浄化すうる」という意味がありますが、喜捨をすることでアッラーの恩寵により人の富と魂を浄化することになるのです。

第4の行い

「ラマダーン」月の断食。ラマダーンはイスラーム太陰暦の9番目の月にあたりますが、その1か月間夜明け前から日没まで断食を行います。日中の間、ムスリムは飲食や性行為を絶ち、加えて悪口やうわさ話など、イスラームの教えで禁じられていること一切を慎みます。

＜この行為の意義＞　断食を行うことで、自制心、忍耐、そして最終的には信仰と神への意識（タクワ）を高め、鍛えることができます。また、自分より恵まれない人々、1日に1食すら食べられないような人々のことを心にとめるきっかけにもなります。

第5の行い

メッカへの巡礼（ハッジ）。経済的・肉体的に可能なムスリムは全員、一生に一度はメッカへ巡礼することが義務付けられています。

メッカの「アブラハムの御立ち処」（マカーム・イブラーヒーム）。アブラハム（彼にアッラーからの平安あれ）がカーバ神殿建設の際立っていた場所。

＜この行為の意義＞　聖地巡礼は1年に一度、世界中からムスリムが集まる一大イベントです。人類の団結と宗教の一致、つまり神はひとつ、人類はひとつ、宗教はひとつ、ということの証明なのです。巡礼はアッラーを崇拝したたえる行為であると同時に、預言者アブラハムとその息子イシュマエル（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）の行った崇拝行為と犠牲をしのぶものでもあります。

これら五行は、ムスリムの心を肉体的欲求と物質主義から切り離し、精神的意識の啓発と自己向上へと導いてくれます。つまり、人を物理的次元から、常に主と主への義務・責任、そして人類への責任に対する自覚がある、その存在の精神的次元へと高めてくれるのです。

オマーン・マスカットにあるスルタン・カブース・グランド・モスクのミナレットの眺め。かつては、ミナレットのそびえる塔から礼拝の呼びかけが行われていた。今日においてはミナレットはモスクであることを示す建築様式となっている。

創造主アッラーを形容する性格と属性

人にそれぞれ名前があるように、創造主・万有の主も「アッラー」という「人格」としての名前で知られています。「アッラー」という名は性別も、複数形も、派生形もない固有の名称です。アッラーは男性でもなければ女性でもなければ、父からも母からもお生まれになっていません。アッラーにはアッラーと全く同じものも、アッラーに並ぶ同等のものもありません。その存在は純粋で他の存在を許さないことから、アッラーは「アル＝ワーヒド」、すなわち「唯一なるお方」と呼ぶにふさわしい唯一の存在なのです。アッラーは唯一無二なるお方です。そこで次の4つの点が挙げられます。

1. アッラーには、①「自存するお方」、「自足するお方」、「永続するお方」など、至高の超越した存在を形容する固有の属性、②「最も高遠なるお方」、「永生するお方」、「生を与えるお方」、「すべてを聞くお方」、「すべてを見るお方」、「全能なるお方」、「最も力強いお方」、「全てを従えられるお方」など、その性格と絶対的な能力を網羅した、比類なき存在を形容する固有の属性があります。これらの属性はすべてアッラー固有のものであり、他の存在を形容するのには用いられません。

2. アッラーには、「最も慈悲深いお方」や「最も赦し深いお方」、「最も哀れみ深いお方」、「最も英知あふれたお方」など、その属性に由来する数々の美名があります。

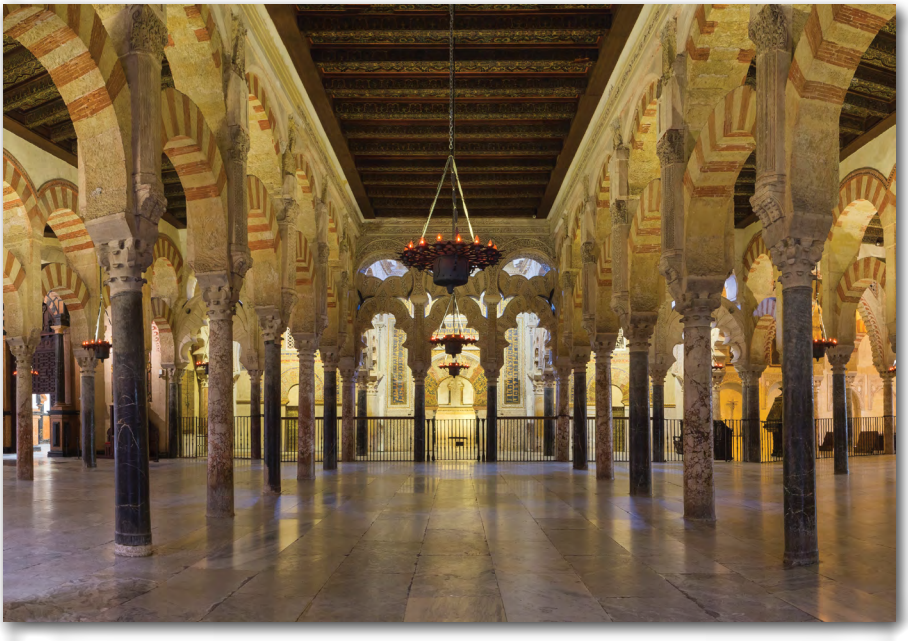
3. アッラーの神性、万物を支配する権利、そして万物を僕として奉仕させる権利（ウルヒーヤ、ルブービーヤ、ウブーディーヤ）は、アッラーだけのものであり、他の存在については認められません。

4. この神の栄光をたたえ、「アッラー」という御名は、心から服従し愛すべき唯一の存在で、あらゆるものからの守護と庇護を賜るお方を意味します。

このように、アッラーの御名の意味をひも解くと、真の一神教主義の定義となります。さらに、その御名にはこのような深い意味があり、イスラーム教についての著書では「アッラー」も「神」も同義語として頻繁に使用されていますが、アッラーは単に「神」という言葉では説明しきれないのです。

アッラーは世界をお創りになって存続させるお方であり、世界のあらゆる創造物が、アッラーを信仰せよ、アッラーへの感謝の気持ちを表す形としてアッラーに服従せよと呼びかけています。アッラーを形容する性格、属性、名前を否定したり、他の存在に結び付けたり（シルク）することはアッラーに対する甚だしい不義理であり、最大の罪悪となります。シルクを犯した者は悔悟しアッラーに赦しを請わないかぎり、アッラーは決してお赦しにはなりません。クルアーン第4章48節でアッラーは次のように仰っています。

本当にアッラーは、（何ものをも）かれに配することを赦されない。それ以外のことに就いては、御心に適う者を赦される。アッラーに（何ものかを）配する者は、まさに大罪を犯す者である。



コルドバのメスキータ。コルドバの大モスクとも知られるが、教会としては聖マリア大聖堂と呼ばれ、カトリック教会の司教座聖堂である。最も優れたムーア建築の建物のひとつとされている。

預言者ムハンマド～その生涯と人物像～

ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、アッラーが全人類に遣わされた預言者です。預言者ムハンマド以前にも、アッラーはノアやアブラハム、モーセ、イエス（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）など数々の預言者をお遣わしになっています。預言者は皆それぞれ特定の国、特定の時代に遣わされていますが、ムスリムはアッラーの預言者全員を信じ、その名誉をたたえ、尊重しています。中でも預言者ムハンマドは、神の純粋なる普遍のメッセージを全人類に伝えるべく遣わされた最後の預言者ということで、ムスリムから深く敬愛されています。[7]

血筋

預言者ムハンマドはアラブ人で、アブラハムの息子イシュマエル（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）の子孫にあたります。バニー・ハーシムという、メッカの有力部族クライシュ族の諸氏族の中でも名門一族の出身です。

生まれ

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は西暦570年、イエス（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の誕生から約600年後にメッカで生まれました。両親とも高貴な血筋の生まれで親族関係にありました。父はムッラーの息子キラーブの息子クッサイの息子アブドゥルマナーフの息子ハーシムの息子アブドゥルムッタリブの息子アブドゥッラー、母はムッラーの息子キラーブの息子ズフラーの息子アブドゥルマハーフの息子ワハブの娘アーミナといいました。

預言者ムハンマドの父はムハンマドが生まれにる前に既に亡く、母もムハンマドがたった6歳の時に亡くなり、幼いムハンマドは祖父のアブドゥルムッタリブの手で育てられました。その2年後、アブドゥルムッタリブも亡くなり、新たにバニー・ハーシム家当主となった叔父のアブー・ターリブのもとで養育されました。

人格

預言者となる前、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は真面目で高潔な人物に成長していました。読み書きはできませんでしたが、強い道徳観を持った人でした。偶像崇拝が一般慣習であった当時において、ムハンマド自身は一切偶像を崇拝せず、代わりにメッカ郊外の洞窟に何日も籠り、創造主と創造物について瞑想することを習慣としていました。

ムハンマド（アッラーからの祝福と平安あれ）

「正直者で信頼できる者」（アッサーディクル・アミーン）と知られていたムハンマドは非常に誠実な人物だったため、商取引や保管のために財産を彼に預ける人がたくさんいました。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は貧しい人や恵まれない人を保護したり、支援組合に参加したりして民衆を支えていました。

神の啓示

いつものように洞窟に籠っていたとき、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は天使ガブリエルを通じてアッラーから最初の啓示を受けました。

読め、『創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。』読め、『あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。』
（クルアーン第96章1～5節）

この啓示が授けられたのは西暦610年、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が40歳の時でした。

ここで重要なのは、この最初の啓示は信仰を主張する上での根拠、さらに言えば信仰の根拠そのものについて知識と論理を挙げていることです。

天使ガブリエルを通じた天啓は、その後の預言者の生涯23年間にわたって続きました。最初の13年間はメッカでイスラームの言葉を広めましたが、預言者とその信奉者達は強い反発と迫害に遭い、西暦622年、どんどん激しさを増していく執拗な迫害のため、預言者一同はメッカの約400km北に位置するメディナの街へと移住を強いられました。メディナの住民は敬意をもって寛大に迎え入れ、預言者はその後引き続き10年にわたりメディナで授かったアッラーの言葉を人々に伝え、同時にイスラーム国家の樹立に着手しました。

預言者の死

西暦632年、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は少しの間病を患った後、63歳でこの世を去り、亡骸はメディナで妻アーイシャ（彼女にアッラーのご満悦あれ）の家の敷地内に埋葬されました。

そこであなたは（凡て）アッラーに御任せしなさい。本当にあなたは、明白な真理の（道の）上にいるのである。（クルアーン第27章79節）

預言者の信憑性

人類の歴史を通じて、神の預言者は皆、本当に神の預言者なのかどうかその資格を常に問われてきましたが、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も例外ではありません。クルアーンの教えでは、神の預言者たる資格は高潔な人格と主から託された言葉の内容が紛れもない真実であること、とされています。預言者ムハンマドについては、次の4つの論点でその信憑性を裏付けることができます。

論点①

本書4.から分かるように、預言者ムハンマドは極めて誠実で、周りの人から非常に尊敬されており、「正直者」とあだ名されてすらいました。預言者は40歳の時に預言者としての使命を帯び、布教を始めました。このような立派な人格の持ち主が若くもない年齢になって突然神の預言者を騙る嘘つき、詐欺師になるなど、理屈では考えられません。

社会的地位を高めたかったのではないかという意見もあるでしょうが、ムハンマドはメッカのクライシュ族という最も有力な名門部族出身で、すでに多くの尊敬を集める高名な人物でした。実際、預言者として神の言葉を伝え始めたころ、周囲から布教をやめさせようと部族長の地位まで差し出されましたが、預言者は断固として拒否したのです[8]。このことから、社会的地位を求めていたのではないことが証明されます。

論点②

神の使徒は、彼らに下された神の言葉で彼らが本当に神の使徒であると裏付けられており、預言者ムハンマドの場合はクルアーンが裏付けとなる証拠です。本書第7章で説明していますが、クルアーンが預言者によって書かれた可能性はゼロであり、クルアーンは確かに天啓です。実際クルアーン自体が、クルアーンを書いたのは預言者ではないかと疑う者がいればクルアーンと同様のものを作ってみせよと、人間に対し挑戦を投げかけています。先ほど述べた

ように、預言者はこのような本を書けるような学者ではありません。クルアーンは、預言者が正真正銘の神の預言者であることの証であり、預言者自身が主張した唯一の奇跡なのです[9]。

論点③

預言者ムハンマドが始めた活動は、人類史上類を観ないほど、徹底的・急激に人間の文明に明白な変化をもたらしました。それだけでなく、イスラーム以上に人類の発展と文明に継続した影響を及ぼした宗教は他にありません。このように文明が目覚ましく、また長きにわたって変貌を遂げたことは、偽者の提唱した運動では成し得たはずがありませんし、理屈でも考えられません。

論点④

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の到来は、ユダヤ教、キリスト教、ヒンズー教、さらに仏教といった主だった宗教すべての教典で予言されていたのです。

クルアーンでは、ユダヤ教とキリスト教両方の啓典で預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）について予言していると述べられています。

> **かれらは文字を知らない預言者、使徒に追従する者たちである。かれはかれらのもっている（啓典）律法と福音の中に、記され見い出される者である。（クルアーン第*7*章*157*節）**

申命記第18章18節には次のように記されています。

> **わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。**

モーセ以降に登場した預言者の中で、この旧約聖書の1節に当てはまるのは預言者ムハンマドだけです。まず、ユダヤ人の同胞とはアラブ人を指します。イスラエルの民（ユダヤ人）はイサクの子孫、アラブ人はイシュマエルの子孫で、イサク、イシュマエルは2人とも

アブラハムの息子です。よって、双方の子孫は同胞にあたります。また、ムハンマドはモーセ自身に似ていますが、イエスは違います。①モーセもムハンマドも、父親と母親がいましたが、イエスは母親のみで父親がいません。②モーセもムハンマドも、母親の胎内で自然妊娠から生まれていますが、イエスは母親の胎内で奇跡によって宿っています。③モーセとムハンマドは結婚し子どももうけていますが、イエスは結婚しておらず子どももいません。④モーセとムハンマドはそれぞれの民に新しい律法をもたらしましたが、イエスはもたらしていません。⑤モーセとムハンマドは天寿を全うし亡くなっていますが、イスラーム教でもキリスト教でも、イエスは死という自然な形でこの世を去ったのではないと信じられています。さらに、クルアーン第53章3〜4節で、預言者ムハンマドは自分の言葉で話していたのではなく、その言葉は神から直接啓示や霊感によって授けられたものであると説明されています。

次に新約聖書を見てみると、ヨハネによる福音書で次のように書かれてあります。

言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。（ヨハネによる福音書第*16*章*12*〜*14*節）

この節も、自分の言葉を紡ぐのではない「真理の霊」について言及しています。真理の霊は聖霊ではありません。聖霊は常にイエスとともにあるからです（ルカによる福音書第4章1節および3章22節、ヨハネによる福音書第20章22節、使徒言行録第2章4節他）。また、この真理の霊はイエスをたたえることになっています。イエス以降に登場し、イエスのたたえた預言者はムハンマドの他にはいません（本書11.を参照）。このことから、イエスの後に到来するこの「真理の霊」がムハンマドであることは確実です（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）。

イスタンブールのアジア側にそびえるミナレット

それだけでなく、聖書では預言者ムハンマドについて、イザヤ書第29章12節、ヨハネによる福音書第14章16節、同第16章7節、マタイによる福音書第21章43節、および使徒言行録第3章22節でも予示しています。これら聖書の一節で「慰め主」という言葉が使われていますが、この言葉はギリシャ語の「パラクレートス」の訳語にあたります。パラクレートスはギリシャ語の「ペリクリトス」という語が訛って転じたもので、「ペリクリトス」は「祝福された者」という意味になり、アラビア語で「アハマド」や「ムハンマド」と訳されます。[10]

また、中立的な立場から慎重に行われた研究から、ヒンズー教、さらに仏教の教典でも預言者ムハンマドについて予示されていたことが分かっています。ヴェド・プラカシュ・ウパッダイ博士は自著『ヒンズー教典におけるムハンマド』おいて、ヒンズー教典に記された数々の預言者への言及を明らかにしています。『ヴェーダ』諸聖典では来る聖賢について触れており、その描写が預言者ムハンマドにぴったりと当てはまるのです。本来サンスクリット語で書かれたその描写をいくつか挙げます。

1. 「ナラシャグサ」・・・「祝福された者」。預言者の名前である「アハマド」、「ムハンマド」両方の意味です。また、ナラシャグサの出生地や特徴も預言者のものと完全に一致しています。

2. 「アンティム・リシ」・・・「最後の聖賢」。預言者ムハンマドは人

類に遣わされた最後の使徒です。

3. 「カルキ・アヴァタル」・・・最後の時代に訪れる聖賢を指します。預言者ムハンマドは全人類に対する最後の使徒として遣わされています

4. 「カウラム」・・・「移民」。預言者ムハンマドはメディナでは移民でした（本書4.を参照）。

5. 父親を「ヴァイシュヌヴェシュ」、母親を「スマティ」という・・・「ヴァイシュヌヴェシュ」は「神の僕」、「スマティ」は「安全」を意味し、それぞれアラビア語の「アブドゥッラー」と「アムナ」、すなわち預言者の両親の名前にあたります。

6. 来る聖賢の名は「ママハ」という・・・「ママハ」はサンスクリット語ではなく、アラブ人の名前「ムハンマド」をサンスクリット語に近い発音にしたものだと思われます。

仏教経典では、ゴータマ・ブッダ（釈迦牟尼仏）が「アンティム・ブッダ」、すなわち「最後の聖人」の到来を予言しており、その名をマイトレーヤ（弥勒菩薩）といいます（ケーラス著『仏陀の福音』P.217）。マイトレーヤの描写は、預言者ムハンマドの描写とも重なります。

1. 預言者ムハンマドは最後の使徒、つまり最後の聖人。

2. マイトレーヤという名は「慈しみ」という意味・・・預言者ムハンマドもクルアーンの中（第21章107節）で世界のすべての人に対する「慈悲」と形容されています。

3. マイトレーヤは仏の特徴すべてを兼ね備え、高貴な生まれで、洞窟に籠っているところに天使が訪れ、複数の妻と子をもうけ、生活のために働き、普通の人と同じように命を全うする・・・この描写はすべて預言者ムハンマドに当てはまります。

4. マイトレーヤは統治者・・・ムハンマドは預言者であるだけでなく、ムスリム国家の統治者でもありました。

5. マイトレーヤは過去の仏について語る…ムハンマドも過去の預言者について詳細に語っています。クルアーンには、預言者ムハンマド以前に到来した25人の預言者の話が登場します。

6. マイトレーヤは現世で教えを受けない…預言者ムハンマドは文盲で、現世で彼を教え導く人間の師はいませんでした。その知識はすべて神の天啓から授かったものなのです。

以上をまとめると、預言者を本物の神の預言者たらしめるものは、その高潔な人格と、託された言葉、その活動により文明がその後長きにわたり変貌すること、世界5大宗教のうちイスラーム以外の宗教でも教典に預言者の到来について予言されていること、の4つの点にあると言えます。

メディナの預言者モスク（マスジド・アル・ナバウィ）。モスクは預言者により西暦622年、預言者の家の隣に建てられた。長年にわたり増設が繰り返された結果、今日では世界最大のモスクのひとつに数えられ、メッカの大モスク（マスジド・アル・ハラーム）に続く第二の聖地である。

クルアーンの歴史と内容

アッラーが天使ガブリエルを通じて預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に下された啓典クルアーンは、この世の終わりまで、全人類に対するアッラーの最後の啓示です。クルアーンは、先に下された啓典の内容が正しく真実であることの確証であり、今日まで残っている部分に加えられた改ざん点を正す、神の人類への最後の御言葉なのです。[11]

啓示

クルアーンはアラビア語で、西暦610年～632年の23年間をかけて段階的に下されました。このように少しずつ時間をかけて預言者に啓示を授けたことで、当時の信仰者は特定の状況に応じた導きをまさにその状況にいるときに得ることができ、また、神の律法が信仰者の間にしっかりと周知され受け入れられ、その生活の中で実施されるようにしたのです。

記録と保全

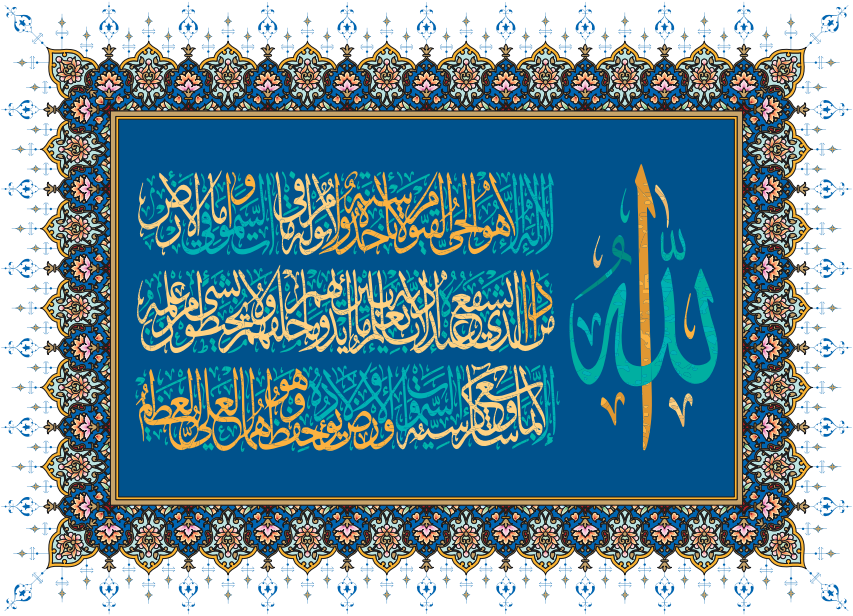
預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は啓示を受けた際、自分の指示と監督のもとお抱えの書記に啓示の言葉を書き留めさせていました。それと同時に、預言者自身のみならずその教友たちも男女問わず皆、啓示が下されるごとにその言葉を暗記していました。こうして、クルアーンは預言者の存命中に文書化され、さらに男性だけでなく女性の信者の記憶にも記録されたのです。このクルアーンの暗記は現在でも行われており、イスラーム教の歴史を通じ、クルアーンを一言一句違うことなく原文のまま暗記しているムスリムはどの時代にもたくさんいます。今日、クルアーンを最初から最後まで全部暗記しているムスリムは2000万人いると推測されますが、クルアーンを部分的に覚えている人は星の数ほどいるでしょう。

内容と全体のテーマ

クルアーンは114章から構成され、各章の長さは3節（第103章と108章）から286節（第2章）まで様々です。クルアーンは、導きと警告、良い知らせを記したものであるだけでなく、過ぎ去った民族とそれらに遣わされた

預言者達について伝える伝承でもあります。全体を通して、クルアーンのテーマは次の4つに分けられます。

1つ目のテーマはアッラーの性質と属性についてです。例えば、本書2.で取り上げた第　112章では、アッラーの唯一絶対性（タウヒード）と、アッラーだけに認められる固有の属性を説明しています。次の一節は「玉座節」（アーヤトルクルシー）と呼ばれ、これもアッラーの属性を説明している一例です。



アッラー、かれの外に神はなく、永生に自存される御方。仮眠も熟睡も、かれをとらえることは出来ない。天にあり地にある凡てのものは、かれの有である。かれの許しなくして、誰がかれの御許で執り成すことが出来ようか。かれは（人びとの）、以前のことも以後のことをも知っておられる。かれの御意に適ったことの外、かれらはかれの御知識に就いて、何も会得するところはないのである。かれの玉座は、凡ての天と地を覆って広がり、この2つを守って、疲れも覚えられない。かれは至高にして至大であられる。

（クルアーン第2章255節）

2つ目のテーマは、人とアッラーの関係です。なぜアッラーは人間をお創りになったのか、アッラーに対する義務とはなにかを説明しています。例えば、アッラーはクルアーン第51章56節でこのように仰っています。

ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。

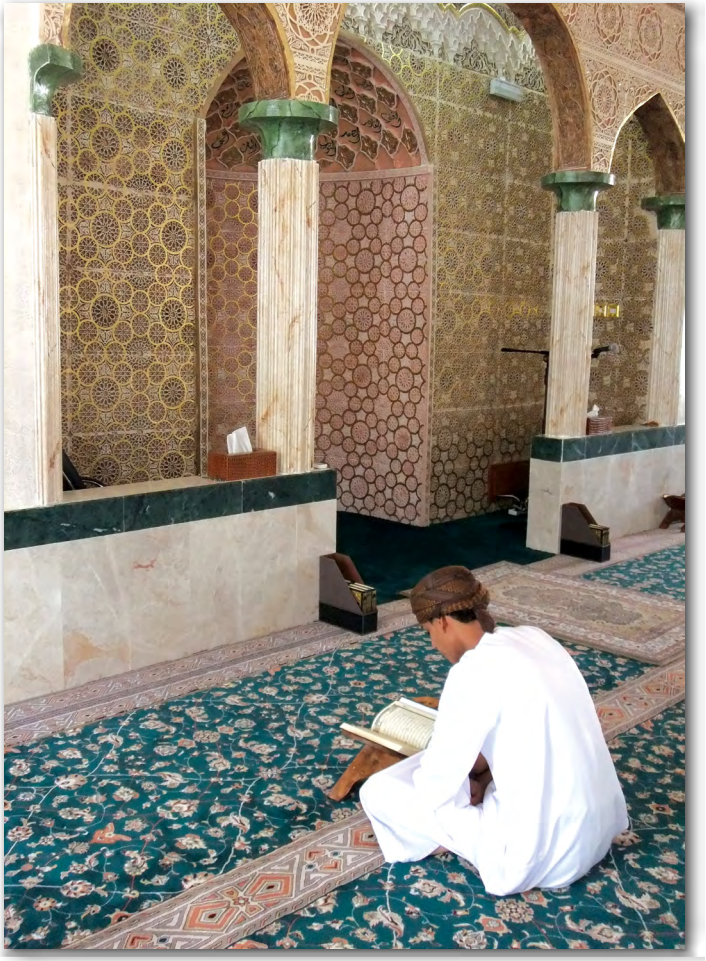
ここでいう「仕える」とは、主に奉仕し主の命ずるところに従って生きるという意味です。加えて、クルアーンでは人間の、主の他の創造物との関係について述べています。天使、ジン、動物、物理的世界のすべてについて、それらが人の存在とどう関わっているか、説明してくれているのです。[12]

3つ目は、法や命令といった形での導きと、道徳観や豊かな人生の規範です。アッラーを正しく崇拝するにはどうしたらいいか、どんな人生を送ったらいいか、クルアーンは導きを授け規範を定めており、導きに従う者には永遠の至福を約束し、従わない者には永遠の苦悶が待っていることを断言しているのです。[13]

4つ目は、預言者を通じて導きを授かった諸民族についてです。例えば、第10章47節でアッラーは次のように仰っています。

それぞれの民に対して、使徒が（遣わされたので）ある。かれらの使徒がやって来た時、事はかれらの間で公正に裁決されて、不当に扱われることはない。

このように、クルアーンは人類への教訓として、アッラーがかつて生きた人々に対してどのように応じたか、その逸話を今に伝えているのです。預言者ノアが民から受けた苦難とその後の洪水、預言者モーセが自分の民とファラオから受けた苦難、そして「最高の物語」と言われる預言者ヨセフの生涯の伝承など、クルアーンはアッラーが時代を通じて人類に遣わされた何千という預言者の中から、全部で25人について紹介しています。[14]



クルアーンの読誦はイスラーム教において崇拝行為にあたるため、クルアーンは今日では世界で最も読まれている本である。

クルアーンと現代科学

クルアーンの啓示は1400年以上も前にさかのぼります。ですがそれにも関わらず、クルアーンの中には天文学、地質学、物理学、生物学、植物学、動物学など、自然科学の様々な分野にわたって近年になって初めて発見された科学的事実の描写が数多くあります。いくつか例を挙げてみましょう。

宇宙の創造

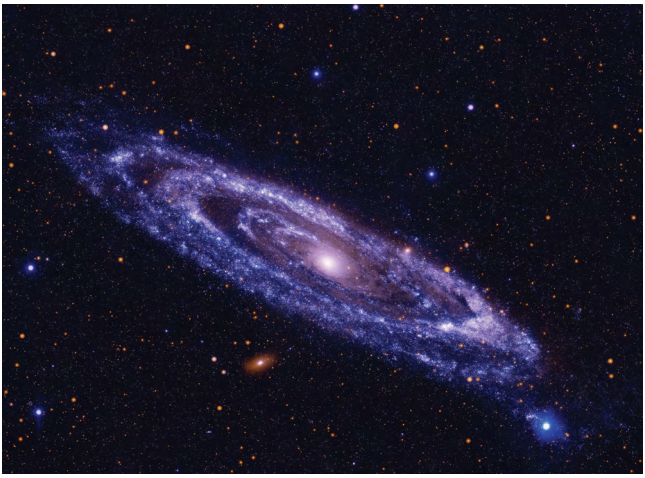
クルアーン第21章30節において、アッラーはこう仰っています。

仰しない者たちは分らないのか。天と地は、一緒に合わさっていたが、われはそれを分けた。そして水から一切の生きものを創ったのである。かれらはそれでも信仰しないのか。

さらに、第51章47節では次のように述べておられます。

われは偉力をもって天を打ち建て、果しない広がりにした。

これらの言葉は、もともと気体だった宇宙が爆発を起こし銀河を形成したという現代の知識と合致しています。これが世に言う宇宙の誕生「ビッグバン理論」です。それだけでなく、現代科学では、この宇宙はその最初の爆発からずっと広がり続けていることが確認されています。



アンドロメダ銀河。アッラーの創造物たる何十億という銀河のひとつ。西暦964年にペルシア人天文学者アブドゥルラフマーン・アル＝スーフィーが発見した。

胎芽の発生

胎芽期の赤ちゃんの発達段階については、クルアーンの中で複数の描写があります。

> **われは泥の精髄から人間を創った。次に、われはかれを精液の一滴として、堅固な住みかに納めた。それからわれは、その精滴を一つの血の塊に創り、次にその塊から肉塊を創り、次いでその肉塊から骨を創り、次に肉でその骨を覆い、それからかれを外の生命体に創り上げた。ああ、何と素晴しいアッラー、最も優れた創造者であられる。（クルアーン第*23*章*12*～*14*節）**

この3節では胎芽の発生について、的確なアラビア語を用いて如実かつ正確に描写しています。まず、受精卵は凝血塊（アラカ）になり、それから胎児（ムドゥガ）へと発達しその後、胎児の体内で骨が形成され始め、骨の周りに肉が付き始める、とクルアーンでは説明されています。

この節に登場するアラカとムドゥガという2つの単語は、胎芽の発達段階の特徴をそれぞれ実に正確に言い表わしており、非常に重要です。

アラカには「血の塊」という意味だけでなく、「釣り下がるもの」、「ヒルのようなもの」という意味もあります。初期の胎芽の様子を見てみると、胎芽は子宮内部で浮いているのではなく、その内壁から釣り下がった状態であることがわかります。さらに、ヒルは動物の肌に吸着しその血を吸いますが、胎児もそれと同様に母親から胎盤を通じて血液をもらっており、その点でヒルのようであると言えます。

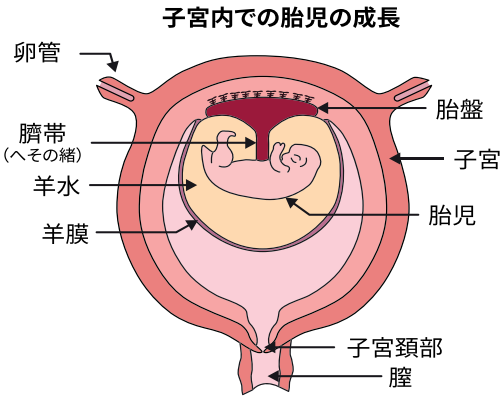
アラカはその後ムドゥガに成長しますが、ムドゥガの意味は「噛んだ肉塊」です。アラカの状態から次の段階にある胎芽を見ると、なるほど歯型の付いた噛み潰したガムのように見えます。

まさに胎芽の発生を実際に見てきたかのような描写ですが、これらの胎芽の形状が初めて科学的に確認されたのは、19世紀に人体の内部をうかがい知る撮影機器が発明されてからでした。それが7世紀にクルアーンでこれほど明らかに説明されていたのですから驚きです。

もうひとつクルアーンで触れている興味深い点は、胎児は「3つの暗闇」に守られているというのです。クルアーン第39章6節において、アッラーは次のように仰っています。

かれはあなたがたを母の胎内に創られ、3つの暗黒の中において、創造につぐ創造をなされた。

現代科学技術のおかげで、今でこそ胎児は母親の腹壁、子宮壁、そして羊膜に包まれていることがわかっていますが、これら「暗闇」についての言及もクルアーンの言葉が正しいことを証明しています。



左の写真：「ムドゥガ」期にあたる胎芽。噛み潰したガムのように見える。右の写真：子宮の内壁にぶら下がる胎芽。三層の保護膜により守られている。

山の役割

人の目にとり、山々は美しく人の心を打つ地面の隆起と映りますが、実は地球の地殻を安定させるのに非常に重要な役割を果たしているのです。地殻の下には、地殻ほどの密度はなく液状に近い層が存在します。そのため、地殻を動かないよう安定させるものが必要ですが、科学的発見により、その役目を果たしているのが山々であると判明しています。山は、地殻の上にそびえていると同時に地殻の下地中深くにその基底が存在し、ちょうど「楔」のように地殻を固定しているのです。

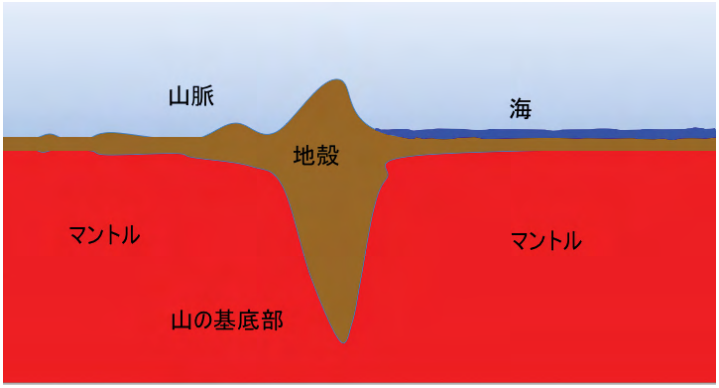
アッラーはクルアーン第21章31節でこう述べられています。

われはまた、大地に山々を据えてかれら不信心者にとっても大地を揺るぎないものとした。

そして第78章6・7節でも次のように仰っています。

われは大地を、広々としなかったか。また山々を、杭としたではないか。

これら山の役割についての一節は現代の科学的知識と完全に合致しています。山に基底があり地中に「根」を下ろしているという考えは1865年に理論として提唱され、この「根」が地殻を安定させているという事実が確立されたのは20世紀も後半に入ってからでした。[15]



図：地球のマントル深くまで届く山の基底。

水は命そのもの

水が生命の源であるということは一般常識ですが、クルアーンはさらにそこから一歩進んで、生きとし生けるものはすべて水からできていると断言しています。前述の第21章30節に加え、第25章54節には次のようにあります。

かれこそは、水から人間を創り、血統による親族と婚姻の関係を定められた方。本当にあなたの主は全能であられる。

今日において、生きた細胞の80%は水でできており、あらゆる生物の体の少なくとも50%は水分であることは周知の事実です。それだけでなく、当たり前ですが、生き物は皆、水無しでは生きられません。

水は命のそのもの：地球規模の気象の変化により雨が少なくなり、世界中で動植物が死滅している。

以上の科学的事実は、クルアーンに示された数々の内容のほんの数例です。1400年前、まだ天文学や物理学、生物学についてほとんど知識がなかった時代に啓示によって人々に示されたこれらの内容は、現代科学の知識に匹敵するものですが、その多くが科学の進歩により過去100年ほどの間に初めて確認されたものばかりなのです。[16]

クルアーンの信憑性

「クルアーンは本当に神の啓示なのか？」これはもっともな疑問です。今日、世界には相反する内容の教典が数多くありながら、そのすべてが神から授けられたものだと主張されており、クルアーンも本当に神が下されたものなのか疑ってしまうのは当然です。先程の質問の延長でこう尋ねる人もいるでしょう。「クルアーンが時代を経て改変されていないと、どうしたら確証が持てるのか？」

これらの質問の答えはクルアーン自体にあります。クルアーンは真実を見極める3つの基準を示してくれているのです。

基準①

真に神から授けられた啓示は、完璧に首尾一貫しており矛盾は一切ありません。アッラーはクルアーン第4章82節でこう仰っています。

> **かれらはクルアーンを、よく考えてみないのであろうか。もしそれがアッラー以外のものから出たとすれば、かれらはその中にきっと多くの矛盾を見出すであろう。**

矛盾や間違いがある教典は、神がお授けになったものであるはずがありません。クルアーンにはいかなる不一致も矛盾もなく、このことはさらに、クルアーンが時を経るうちに人間の手で改変を加えられていないことを裏付けています。クルアーン批判派の間ではよくクルアーンの明らかな矛盾を取り上げていますが、それは彼らがクルアーンに用いられているアラビア語の正しい知識を持っておらず、またそれぞれの言葉が授けられた背景を知らないからなのです。

基準②

真に神から授けられた啓示は、人間の能力を超越して法の定めや道徳、精神的導き、さらに説得力、論証力、雄弁さや洗練といった人が求めるものを総合的に満たしています。この点についてアッラーは、人類に対し、クルアーンに並ぶ本を作り出してみせよと挑戦しています。第2章23

～24節において、アッラーは不信心者にこのように述べています。

もしあなたがたが、わがしもべ（ムハンマド）に下した啓示を疑うならば、それに類する1章〔スーラ〕でも作ってみなさい。もしあなたがたが正しければ、アッラー以外のあなたがたの証人を呼んでみなさい。もしあなたがたが出来ないならば、いや、出来るはずもないのだが、それならば、人間と石を燃料とする地獄の業火を恐れなさい。それは不信心者のために用意されている。

第17章88節でも、繰り返し挑戦を投げかけておられます。

言ってやるがいい。『仮令人間とジンが一緒になって、このクルアーンと同じようなものを齎そうと協力しても、（到底）このようなものを齎すことは出来ない。』

このような挑戦ができるのは全知全能の神だけです。本を一冊書き上げ、後にも先にも誰にもそれに並ぶ本を書くことはできないと宣言するなど、人間では決してできません。それに、もしクルアーンがこれまでに人の手で書き変えられていたなら、それは人がクルアーンと同様の内容の本を作ることができていたはずだということになります。この挑戦は1400年前から今日まで、未だかつて達成されていません。

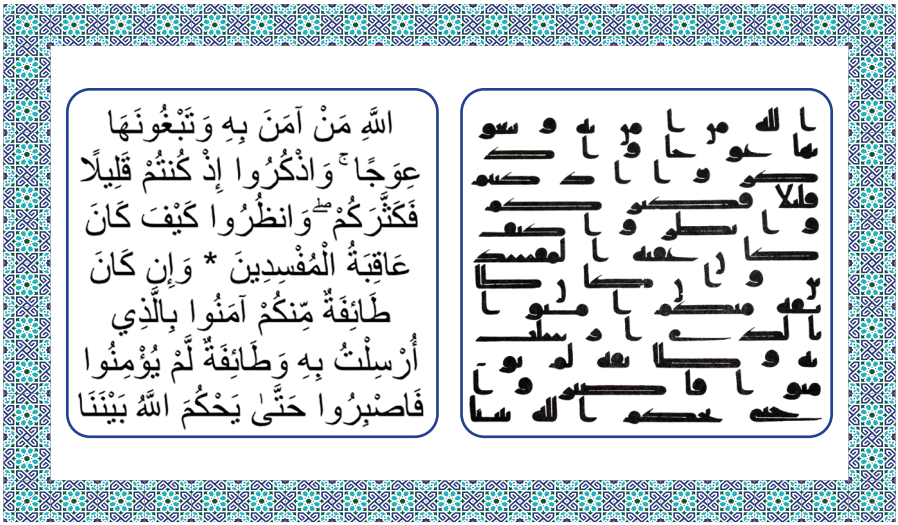
基準③

神の啓示は時代の移り変わりに関わらず、人間の知識が発展しその求めるものが変わって成熟しても、常に普遍なものでなくてはなりません。クルアーンに示された法と正義の原則や経済、社会システム、さらに道徳観も、クルアーンが授けられた1400年以上前と変わらず現代にも通用するものです。さらに、本書6.で紹介したように、クルアーンは現代の自然科学の知識と全面的にあらゆる角度から合致しています。

もし仮にクルアーンが神以外の存在からもたらされたものだったり、改変されていたりすれば、時と共にその内容は廃れ、普遍性が損なわれていたはずです。クルアーンは、人間の知識と欲求のあらゆる側面にお

いて、どれほど時が経とうとも決して色褪せることなく通じる教えなのです。

以上3つの基準はクルアーンに示されている他の啓示の内容と合わせて、すべて人間の欲求と導きについて深く広く影響しており、クルアーンが奇跡そのものであることを実証しています。事実、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は預言者として活動中、神の御意思により数多くの奇跡を起こしましたが、クルアーンは預言者が主張した唯一の奇跡なのです。



クルアーン第7章86～87節の原本（右）と後世の写本（左）。預言者の時代、アラビア語は非常にシンプルな文字で、母音や発音区別符号（タシュキールまたはイジャム）も一切付けずに書かれていた。イスラーム教がアラビア語を話さない人口にまで広まるにつれ、クルアーンが誤って読まれたり発音されたりするのが目立つようになったため、要注意の母音や発音区別符号が預言者の死から約60年後に導入された。

預言者の慣行

預言者の慣行（スンナまたはスナン）とは、天の導きにより預言者に教えられ（クルアーン第53章3節）、その教友たちが後世に伝えた預言者の教えや生活の模範とすべき行いです。スンナはクルアーンとは別個のものですが、クルアーンに次ぐ第2のイスラームの教えの拠り所となっています。

天啓として与えられ、預言者の存命中に記録されまとめられたクルアーンと違い、預言者のスンナは主に預言者の死後（西暦632年）文書に記され整備されました。スンナの記録である言行録の作成は預言者の死後すぐ開始されましたが、その編纂作業は西暦8世紀中頃に本格化し、9世紀に入って最も盛んに行われ、『ムスナド・アッラビーア・イブン・ハビーブ』は8世紀末、サヒーフ・アル＝ブハーリーとサヒーフ・ムスリムはそれぞれ9世紀に編纂されています。

スンナは口承で何人もの継承者により語り継がれてきたため、その信憑性を確認する緻密な手法が発展を遂げました。この手法では、ある特定のスンナを語り継いできた一連の伝承者の流れ、スンナの内容、そしてそのスンナが行われたとされている背景状況を徹底的に調べ、スンナはその信憑性の高さに基づき分類されます。この立証方法の体系（イスナード）は今日でも採用されており、原典の言行録に紛れ込んでしまった可能性のある虚偽のスンナの伝承を識別するのに役立っています。

預言者のスンナは、イスラーム教における導きと立法において次のような役割を果たしています。

1. クルアーンの啓示それぞれの目的を明確にし、その言葉の意味について詳しく説明する
2. クルアーンに次いでイスラーム法が立脚する第2の典拠であり、物事の是非・善悪についての判断ではクルアーンと双璧をなす
3. クルアーンに示された訓令を裏打ちし、クルアーンの権威について証言する
4. クルアーンで命じている崇拝行為のやり方を説明する
5. クルアーンに示された倫理観について説明し、その実践について率先垂範する

預言者のスンナから3つの例を見てみましょう。

アブー・ウバイダによると、ジャービル・イブン・ザイドはイブン・アッバース（彼にアッラーのご満悦あれ）から、預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が「我々に不義を働くものは我々の身内ではなく、我々の幼子に慈悲をかけ、年配者を尊敬しない者は我々の仲間ではない。」という言うのを聞いたと教わった。（『ムスナド・アッラビーア・イブン・ハビーブ』ハディース*No.582*）

アブー・アル=ミンハルは言った。「アル=バラ・ビン・アジーズとザイド・ビン・アルカムに両替行為について尋ねたところ、両人は、『私達はアッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の時代に商人をしていて、使徒に両替について尋ねました。すると「手渡しなら問題ないが、そうでない場合両替は認められない。」と仰いました。』と答えました。」『サヒーフ・アル=ブハーリー』商売の書　ハディース*No.276*）

アブー・フライラによると、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように言ったと伝えている。「女性は相談なく結婚させてはならず、（処女の）乙女は本人の許可を得てから結婚させなければならない。」皆が預言者（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に「乙女本人の許可が得られたとはどのようにわかりますか。」と尋ねると、「何も言わずにいることだ。」と言った。（『サヒーフ・ムスリム』婚姻の書 第*008*巻*3303*番）

以上、数ある預言者の慣行の中から数例を取り上げましたが、このように預言者のスンナはイスラーム法をわかりやすく説明し、社会規範について指導したものなのです。

死後の世界

死は誰にでも訪れるものであり、誰しもあの世と向き合わなければなりません。死んだら何もないという考えで来世を完全否定している人や、来世のことを蔑ろにして自分は大丈夫だろうと楽観視している人もいるでしょう。しかし、どちらの場合も、大それた賭けに出ていることは間違いありません。来世というのは永遠であり、非常に大事なことです。最も賢明なのは、来世があることを信じ、行動を起こすことでしょう。そして宗教とは、要はあの世での永遠に備えることなのです。

来世がある証拠

宗教の信仰だけでなく、あの世があるということは論理と常識から推測できます。以下の論点から考えてみましょう。

論点①　神の創造物の中で、人間だけが知性と論理的思考力、意志の自由を併せ持っています。この特徴は、人には精神的、身体的、さらに物理的側面において他のすべての被造物に勝る能力があるということを示唆しており、だからこそ神は、アダムをお創りになった際、天使達に対しその大きな可能性を認めアダムにひれ伏すように命じたのです[17]。これまで宇宙探査、地球全体を網羅したリアルタイム通信、遺伝子操作した食物、人工知能の発明などが人の手により達成されてきましたが、人の知識が広がるにつれ今後もさらに数多の進歩の偉業が成し遂げられるでしょう。ならば、この「人間」という素晴らしい神の創造物は何の神聖な目的も天の計画もなしに創られたはずはありません。生きて、死んで、それでお終い、ではないはずです。実はこの「生きて死ねばそれで終わり」という考えこそ、かつての人々が思ったことだとクルアーンは伝えています。

かれらは言う。「有るものは、わたしたちには現世の生活だけです。わたしたちは生まれたり死んだりしますが、わたしたちを滅ぼすのは、時の流れだけです」しかしかれらは、これに就いて何の知識もなく、只臆測するだけである。（第45章24節）

まさに、死後には何もないという考えなど、単なる憶測に過ぎないのです。

論点②　宇宙のすべてが、神の知識と御計画は完全完璧であることを訴えています。ですが、人間は常に、この世でもっと満ち足りた人生を謳歌したいという切望を抱えて生きています。言うなれば別の世界で起こるパラレルライフです。このことは、人の現世は完璧ではないということを示しています。どれほど豊かで充実した人生であっても、人は理想の人生というものに憧れ求めずにはいられないのです。その理想の人生がどういったものなのか、はっきりと言い表すことはできず、それゆえ手に入れられずに不幸な思いや絶望感にまで陥ってしまいます。この求めてやまないパラレルライフこそ、実は神の完璧な創造の御業が果たされる死後の世界なのです。この世は完璧ではなく、永遠で完璧な来世に向け準備をする仮の世なのです。

論点③ 人間は選択の自由を与えられています。清く正しい人もいれば、悪の道を選ぶ人もいます。邪悪な人間は他人に多くの苦しみをもたらしますが、権力や影響力がある地位にいたり、人の作った法律が及ばなかったり、法制度が腐敗していたりなど、様々な理由にかこつけその報いを受けずにいます。一方で、非道極まりない罪を犯し、人間の法による正義では決して十分な罰を与えることなどできないこともあります。考えてみてください。無数の罪もない人を殺した犯人がいたとします。そんな人物に対していったいどんな罰が相応だと思いますか。究極の正義はこの世では決して果たされ得ません。真の正義への願いはあの世でしか果たされないのです。死後の世界がなければ実に不公平でしょう。

論点④ 先ほど述べたように、人間は現実を自然と認識するように作られています（アラビア語でフィトラ）。そのため、人類史上、人間の大多数は死後の世界を信じていたことがわかります。例えば、古代文明に関する歴史上の記録が示すように、人々は死後の継続的な生への移行に備えていました。死は、次の次元へ、来世へと魂の継続的な生を導くものであるということを、彼らは十分に認識していました。

論点⑤ クルアーンでは以下の内容について詳しく説明しています。①自然科学における数々の現象（本書6.を参照）、②歴史上の出来事、そし

て③文明に明らかな変化をもたらし、今日においても人類の生活に深く影響を及ぼしている律法と道徳規範です。これらの詳細のうち、間違っていたり根拠がなかったりしたものは一切ありません。このようにクルアーンの信憑性と正当性は疑う余地がなく、クルアーンでこれほどまでに強調して描かれている死後の世界について疑問を呈すること自体が疑問です。

以上の議論から、死後の世界があるということは事実というだけでなく、必然だということがおわかりいただけるでしょう。何より、死後の世界がないとする反論は見当たらず、あったとしても簡単に論破できるものです。

死と死後の世界についてのイスラームの教え

人間の魂は永遠の生の中で様々な段階を経るとされています。地上での命は、来世での次の段階への準備なのです。死は、人の生における次の段階の始まりを意味します。すなわち、死と復活の間の中間地点です。この段階はアラビア語で「バルザフ」と呼ばれます。これは墓場にいる間のことで、このとき死者の魂は霊的に完全に覚醒した状態で生の別の次元で目覚めるのです。地上で死後のためにしっかり備えた人は、その後にやってくると約束された悦びと幸せを思い、歓喜し安堵しますが、一方、来世があるという現実に向き合わなかった人は、迫り来る苦難を目の前にし深く後悔することになります。クルアーンでは、この歓喜と絶望、どちらに転ぶかは死の瞬間に天使達から告げられると説明しています。

本当に、『わたしたちの主は、アッラーであられる。』と言って、その後正しくしっかりと立つ者、かれらには、（次から次に）天使が下り、『恐れてはならない。また憂いてはならない。あなたがたに約束されている楽園への吉報を受け取りなさい。（と言うのである）。（クルアーン第*41*章*30*節）

あなた（ムハンマド）はもし天使たちが不信心な者たちの（死にさいし）魂を取る時、その顔や背中を（如何

に）打つかを見るならば（どうであろう）。（その時天使たちは言うであろう。）『火炙りの懲罰を味わえ。（第8章50節）

この墓場にいる期間は死後の世界における最初の段階であり、地上で生きている間に取った選択の結果をほのめかす前兆なのです。伝承によると、預言者は次のように言ったそうです。「墓場は来世の最初な段階である。無事に通り過ぎればその後は安泰であるが、もしこの最初の段階で躓けばその後はもっと苦しいことになる。」

死者の魂は、「最後の審判」のその時までこの中間地点に留まります。最後の審判は、形あるものすべてが存在の次の次元へ、来世へと生まれ変わる時です。極めて重大な出来事であり、クルアーンでも鮮明に描写されています。例えば、第22章1～2節では次のように記されています。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。（審判の）時の震動は、全く一重大事である。その日あなたがたは見るだろう。凡ての哺乳する者は、哺乳することを忘れ、凡ての妊婦はその胎児を流し、また人びとは酔わないのに、酔いしれたように見えよう。思うに、アッラーの懲罰が厳しいからである。

最後の審判は来世の到来を告げ、死者の復活と全人類の再生から始まります。クルアーンでは、この日は不信心者にとって実に過酷な日だと描かれています。不信心者は、もう一度地上で人生をやり直し道を正す機会を乞い願うのです。信じる者にとっては、この日は何も恐れることはありません[18]。

人間は、最後の審判を受けるため集められます。この最後の審判の日はまさに天地を揺るがす大事であり、クルアーンでも「悔恨の日」（第19章39節）、「勝利の日」（第32章29節）、「御怒りの日」（第76章10節）、「重大な日」（第76章27節）、「偉大なる日」（第19章37節）、「清算の日」（第38章16節、 40章27節）など、様々な言葉で描写しています。最後の審判の日こそ、人の精神的価値が主の御許で見極められるときです。この日は、神を信じ正しい道を歩んできた者には大きな歓びと幸福が約束される日で

あり、神を信じず終末の日、つまりこの最後の審判の日を信じなかった者には後悔と悲嘆の日でもあります。この2つの展開は、クルアーンの次の言葉にまとめられています。

おお人間よ、本当にあなたは、主の御許へと労苦して努力する者。かれに会うことになるのである。その時右手にその書冊を渡される者に就いては、かれの計算は直ぐ容易に清算され、かれらは喜んで、自分の人々の許に帰るであろう。だが背後に書冊を渡される者に就いては、直に死を求めて叫ぶのだが、燃える炎で焼かれよう。本当にかれは、自分の人々の中で歓楽していた。かれは、本当に（主の許に）帰ることなどないであろうと思っていた。（第*84*章*6*〜*14*節）

イスラームの教えでは、善人は来世でその家族や大切な人の中で生前善人だった人と再会できるとされています[19]。楽園で親きょうだい、子どもや友人と再会できることほど嬉しいことはありません。ですが、悪人には、もっと恐ろしい展開が待っています。自分の存在を恨めしく思い、消えてしまいたいとさえ願うことになるのです。

本当にわれは、懲罰が近いと、あなたがたに警告した。その日、人は、自分の両方の手が前もって行ったもの（所業）を見るであろう。不信者は、『ああ、情けない、わたしが塵であったならば。』と言うであろう。（クルアーン第*78*章*40*節）

オマーンのスルタン・カブース・グランド・モスクのカーペット

他の宗教に対するイスラーム教の考え

人間は、創造主の存在を自然と認識する意識と生来の基本的な道徳観（フィトラ）を持って創られています。人類の歴史を通じて神はすべての民族に対し一連の預言者を遣わし、この本来人間にとって当たり前のことを人々の心に呼びさまそうとされてきました。預言者全員に下された神の御言葉は、基本となる信条では始終一貫した内容を伝えています。すなわち、神は唯一の存在であること、来世を信じること、清く正しくあることです。ただ、法や崇拝の形態は様々でした[20]。アッラーはクルアーン第42章13節でこう仰っています。

かれがあなたに定められる教えは、ヌーフに命じられたものと同じものである。われはそれをあなたに啓示し、またそれを、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーに対しても（同様に）命じた。「その教えを打ち立て、その間に分派を作ってはならない。」あなたが招くこの教えは、多神教徒にとっては重大事である。アッラーは御心に適う者を御自分のために御選びになり、また悔悟して（主に）帰る者をかれ（の道）に導かれる。

信条や宗教が一様でないのは、時を経て本来の神の御言葉の内容から徐々に逸脱していったためです。クルアーンにおいて、アッラーはアブラハムの信仰に立ち返れと人類に呼びかけています。アブラハムは真の一神教信仰者で、歴史上登場する後の神の預言者達の先祖です。よって、イスラーム教の観点から言えば、異教はすべて次の2つに分類されます。

1. 一神教

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教は3つとも、唯一の神を信仰したアブラハム（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の伝統に根ざした宗教で、その最も根幹の部分では同じ信仰と宗教行為についての基本教義を掲げています。

ユダヤ教徒とキリスト教徒は、クルアーンの中で何度も「啓典の民」と呼ばれています。[21]これはつまり、彼らは、律法と福音という神から授けら

れた聖なる啓典を有する民ということです。しかし、現在この2つの啓典は、厳密に言うと、それぞれをもたらした預言者、つまりモーセとイエス（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）に授けられた本来の内容通りではないのです。[22]それゆえイスラーム教では、ユダヤ教とキリスト教はモーセとイエス（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）の本当の教えとは合致していない宗教だと考えられています。

クルアーンが下されたのは、モーセとイエス（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）の伝えた御言葉が正しいことを裏付け、神の最後の御言葉としてそのメッセージを完結させるだけでなく、現在まで残る彼らの伝えた御言葉に潜む本来の御言葉から逸れた不正を正すためなのです。[23]そのため、イスラーム教では、モーセとイエス（彼らにアッラーからの祝福と平安あれ）の伝えた神の御言葉を真に信仰する者はクルアーンの信奉者と同じであるという立場を取っています。

2. その他の宗教

ヒンズー教や仏教など、ユダヤ教とキリスト教以外の宗教について、イスラーム教の考えでは、元来の預言者を介して伝えられる神の御言葉とはかけ離れた宗教で、よってアブラハムの伝統とは関連性のないものと捉えています。このような宗教の中には無神論寄りの教えを掲げるものもありますが、それ以外のものは唯一絶対の神、つまりアッラーを崇拝することから大幅に逸脱し、アッラー以外の複数の神をアッラーと結びつけて信仰しています。唯一絶対の真の神とその他の神々を一緒にするのは、神は唯一無二なる存在とする神の唯一性の信条（本書3.を参照）と真っ向から対立することです。

それでも、これらの相違点に関わらず、イスラーム教ではあらゆる宗旨とその信奉者を尊重しています。アッラーが人間を創りたもうた唯一の神であり、信仰について選択の自由をお与えになったからです。アッラーはクルアーン第10章99節で次のように仰っています。

もし主の御心なら、地上の凡ての者は凡て信仰に入ったことであろう。あなたは人びとを、強いて信者にしようとするのか。

この内容は別の一節、第2章256節でも繰り返されています。

宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷誤から明らかに（分別）されている。

このように、信仰の多様性は、人類の創造におけるアッラーの御計画の範疇なのです。[24]このことを意識して、ムスリムは歴史を通じて異教徒とも平和に、愛情と善意をもって共存してきました。実に特筆すべきなのは、イスラーム教は、その根底にある人間は皆平等であるという平等主義と信仰における意志の自由に基づいて人間の尊厳を守り、道徳的行いを実践する宗教であるということです。

メッカへの巡礼。毎年行われるこの巡礼には、世界各国から300万人以上が唯一絶対の神アッラーを崇拝しにひとつの場所に集まる。宗教はひとつであること、そして人類の結束を実際に示し、強化する行事である。

イスラーム教におけるイエス

イスラームの信条のひとつは、アッラーの使徒全員を信じることです。ムスリムは、イエス（彼にアッラーからの平安あれ）がアッラーの数多の使徒の中でも最も偉大な使徒のひとりだったと信じています。

聖書にまとめられたイエスの生涯と教えは、イエスがこの世を去った何十年も後になって記されたもので、そのためその多くが謎に包まれています。クルアーンではイエスについて名指しで25回も言及しており、イエスの人柄と教えを取り巻く謎と迷信のベールを取り払い、イエスとその母マリア（彼らにアッラーのご満悦あれ）に関する誤った主張の疑念を晴らし、2人を真のアッラーの敬虔な僕としてたたえています。クルアーンの教えをまとめると、次の点が挙げられます。

- イエス（彼にアッラーからの平安あれ）は、聖母マリアの処女懐胎の奇跡により誕生しました。よって、イエス（彼にアッラーからの平安あれ）には父親がおらず、父方ではなく高貴な母方の家系に属しています。「高貴な」というのは、母マリアが預言者の一族の出身だったからです。しかしイエスは、奇跡によって生を受けていますが、ただの人間に変わりありません。クルアーンが伝えるように、イエス自身は、自分がアッラーにより預言者に命じられた人間であること以上のことは決して主張しませんでした。[25] 例えば、クルアーン第5章116～117節において、アッラーは最後の審判の日に起こるある一場面を描いています。

またアッラーがこのように仰せられた時を思え。「マルヤムの子イーサーよ、あなたは『アッラーの外に、わたしとわたしの母とを２柱の神とせよ。』と人びとに告げたか。」かれは申し上げた。「あなたに讃えあれ。わたしに権能のないことを、わたしは言うべきでありません。もしわたしがそれを言ったならば、必ずあなたは知っておられます。あなたは、わたしの心の中を知っておられます。だがわたしはあなたの御心の中は知りません。本当にあなたは凡ての奥義を熟知なされています。わたしはあなたに命じられたこと以外は、決してかれらに告げません。『わたしの主であり、あなたがたの主であられるアッラーに仕えなさい。』（と言う以外

には）わたしがかれらの中にいた間は、わたしはかれらの証人でありました。あなたがわたしを御呼びになった後は、あなたがかれらの監視者であり、またあなたは、凡てのことの立証者であられます。

聖書自体にも、イエス（彼にアッラーからの平安あれ）は謙虚な人物で、自分は神の僕であると断言し、自分が神であるとはただの一度も主張しなかったという証拠が十分にあります。[26]

- イエスはメシア（救世主キリスト）、つまり「主に油を注がれた者」、アッラーに預言者として選ばれた者でした。[27]

- イエスは数々の奇跡を起こしましたが、すべてアッラーの御業によります。最初の奇跡は、赤子のイエスが、処女であるはずなのに子を産んだため不貞を働いたとして責められた母マリアを弁護するため話したことです。後年、死者を甦らせたり盲者やらい病患者を癒したりなど、アッラーの御業により様々な奇跡を起こしました。[28]

- イエスは福音（インジール）を託されていました。[29]例えば、クルアーン第5章46節でアッラーは次のように仰っています。

われはかれらの足跡を踏ませて、マルヤムの子イーサーを遣わし、かれ以前（に下した）律法の中にあるものを確証するために、導きと光明のある、福音をかれに授けた。これはかれ以前に下した律法への確証であり、また主を畏れる者への導きであり、訓戒である。

- イエスはイスラエルの民だけに遣わされ、他の民族は対象ではありませんでした。アッラーはクルアーン第3章49節でこう述べておられます。

そしてかれを、イスラエルの子孫への使徒とされた。

イエス（彼にアッラーからの平安あれ）がイスラエルの民だけに遣わされたという事実は、様々な訳版がある今日の聖書でもそのすべてに記されています。[30]

- イエスは殺されたのでも十字架にかけられたのでもありません。アッラーはクルアーン第4章157～158節でこのように仰っています。

「わたしたちはアッラーの使徒、マルヤムの子マスィーフ（メシア）、イーサーを殺したぞ」という言葉のために（心を封じられた）。だがかれらがかれ（イーサー）を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない。只かれらにそう見えたまでである。本当にこのことに就いて議論する者は、それに疑問を抱いている。かれらはそれに就いて（確かな）知識はなく、只臆測するだけである。確実にかれを殺したというわけではなく。いや、アッラーはかれを、御側に召されたのである。アッラーは偉力ならびなく英明であられる。

イエス（彼にアッラーからの平安あれ）の敵が彼を十字架にかけようとしましたが、アッラーはご自身の遣わした預言者が辱めにあうことを許しませんでした。アッラーは神の預言者を守り、お救いになったのです。

イスラーム教における第三の聖地、エルサレムのアル＝アクサー・モスク。クルアーンに述べられているとおり（第17章1節、53章13～18節）、西暦621年、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安と祝福あれ）がこのモスクから天へと昇った。

イスラーム教の正しさ

世の中には、宗教に関して誤った考えがあります。人々の間に善意と調和、愛を説く宗教はどんな宗教でも、その本質では神と神を敬うことに通じており、信仰してよいというのです。つまり、宗教はすべて基本的に良いもの、同じものであり、特定の宗教を信仰する必要はない、ということです。この考え方には欠点があります。以下に主な理由を2つ挙げます。

第一に、宗教とは、創造主アッラーを崇め敬うことです。主との関わり合い方、主の崇拝の仕方、主の御心に従った地上での生活の送り方を定めたものなのです。この方法はすべて創造主がもたらしたものでなければなりません。よって、真に正しい宗教とは、創造主がお定めになったものである必要があるのです。

第二に、現存する宗教すべてが創造主のお創りになった真の宗教であるというのは誤りです。今日世界に存在する様々な宗教には、教義面だけでなく実践面においても大きな矛盾が複数あるからです。いくつか例を見てみましょう。宗教は全部が全部、それぞれの信奉者が実践する上で、創造主が唯一絶対の存在であるという概念（一神教主義）について合致しておらず、また救済の信条についても宗教間で大きな違いがあり、さらに、宗教上の合法・非合法事項についても宗教ごとに異なっています。

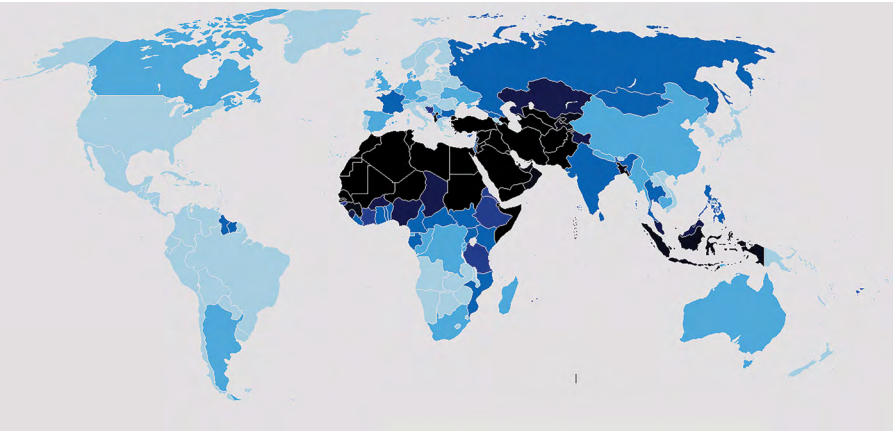
創造主は絶対、自己矛盾など起こしません。なので、主の宗教は全人類に対し終始一貫し、その基本信条と行為において一様でなければなりません。知識と理論をもって真理を追究するかどうかは個々人にまかせられています。宗教はすべて本質的に善であり創造主もお認めになるという考えに惑わされてはなりません。主にかなう唯一の宗教は「主の」宗教なのです。

イスラーム教は、宗教として独自のものではありません。イスラーム教以前の人類の各世代すべてに下された宗教と同じものです。人間の歴史を通じて様々な宗教が興りましたが、それは預言者の伝えた本来の神の御

言葉から逸脱していったためです。最後の使徒ムハンマドと最後の神の御言葉であるクルアーンは、本来の御言葉へ人類を導くために遣わされたのです。よって、創造主にかなう唯一の宗教は、この最後の御言葉に合致するもの、つまり「主の御意思への服従」というイスラームなのです。アッラーはクルアーン第3章85節で次のように仰っています。

イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。また来世においては、これらの者は失敗者の類である。

イスラーム教は、神の使徒全員に共通する宗教です。すなわち、最後の使徒ムハンマド以前に到来したアブラハムやモーセ、イエス（彼らにアッラーからの平安あれ）などですが、彼らは皆、創造主に従属し、その御意思に完全に帰服していたからです。また、イスラームは、先代の諸預言者を心から信奉した人々の宗教でもありました。彼らはそれぞれの預言者がもたらした真の教えに忠実に従っており、彼らの信仰はイスラームだったのです。



世界のムスリム人口（%）

0-1　1-5　5-25　25-50　50-75　75-90　90-100

無神論と不可知論に対する訓戒

無神論は至高の存在（神）の否定であり、来世の否定をも意味します。不可知論は、至高の存在が存在することについて疑念を抱くことです。無神論も不可知論も、否定や疑念の根拠を様々に理由付けています。昔は、その理由は神の存在を物理的に見たり感じたりすることができないことでした。また、人間の味わう苦しみも、「神がもしいるならなぜ苦しまなければならないのか」と神の存在を否定したり疑ったりする理由のひとつでした。現代では論理はもっと高度になり、「神の存在はなぜ科学的に証明できないのか」と問うようになりました。さらに、万物の神羅万象について科学的に説明できるようになったため、神の存在の根拠が一切ないというのです。

イスラーム教は、この否定観念や懐疑心に対して、人の良識、知性、そして神の存在についての理性的な判断力に訴えかけることで対応しています。創造主と創造物の性質はまったくもってかけ離れており、それゆえ人間には神を見るという能力はありません。さらに、神が人の目に見える肉体をお持ちであれば、神は時空と物質に制限・制約されてしまいます。これは理不尽極まりない考えです。なぜなら、時空も物質も被造物であり、創造主を制限できるはずないからです。クルアーンは、創造について知性をもって探求し、神の創造物を通じて神を理解しようと呼びかけています。神が存在することの証拠は、クルアーンでは「印」（アーヤ）と呼ばれており、クルアーンには何百ものこうした印が含まれています。第41章53節において、アッラーは次のように述べられています。

われは、わが印が真理であることが、かれらに明白になるまで、（遠い）空の彼方において、またかれら自身の中において（示す）。本当にあなたがたの主は、凡てのことの立証者であられる。そのことだけでも十分ではないか。

このような宣言をもってクルアーンは、神の創造物を通じて神が存在するという数多の証に考えをめぐらせよと訴えているのです。例えば、クル

アーン第3章190節では、アッラーをこう仰っています。

本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には、思慮ある者への印がある。

まさに、天と地の創造にこそ、驚くべき事実の科学的発見があったのです。つまり、①宇宙にははじまりがあり、無からはじまったということ、②宇宙は正確無比かつ相互に関連した物理の法則とプロセスに基づいて進化したということ、③200以上もの条件が地球上の生命の誕生と発展を可能にしているということ（例：地球と太陽の距離、地球の引力、大気の成分、水の存在など）です。

別の一節でも、アッラーはこう仰っています。

かれこそは、あなたがたのために天から雨を降らす方で、それによってあなたがたは飲み、それによって樹木は生長し、それによって牧畜する。かれはそれであなたがたのために、穀類とオリーブとナツメヤシとブドウその外各種の果物を育てられる。本当にこの中には、反省する民への種々の印がある。（クルアーン第*16*章*10*～*11*節）

この一節では、神の存在を示す印が数多く述べられています。ひとつ例を挙げると、雨が降る仕組みがあります。雨を作るには、無数の物理の法則が関わっており、加えて様々な条件が正確に揃わなければなりません。すなわち、地上から水分が蒸発し、空へ水分が上昇し、水分が結露し水滴となり、水滴が雲へ蓄積され、数千トンにも及ぶ水分を含んだ雲が移動し、そして水滴が雨として降るという、これらの現象の要因となるものです。このプロセスはすべて的確な物理の法則と条件が影響しています。クルアーンは、創造の中にあるこれら幾千数多の印について熟考するよう説いているのです。思考力と論理力のある人間には、このすべてが至高の存在であり創造主である神の存在を証明しているとわかります。この英知にあふれた万物創造の計画、複雑さ、そして正確さと、その計り知

れないダイナミクスが単なる偶然の産物だと決めつけるのは実に不条理です。実際、数々の偉大な現代の科学者が、まさにこの論理的結論に至っています。[31]

またクルアーンは、人間は皆、生まれながらに創造主の存在を認識し主に服従する心（フィトラ）をもって創られていると伝えています。[32]その証拠に、深刻な危機に瀕し人の手ではどうにもならないとわかったとき、人はよく神に助けを求めようとするところがあります。主は預言者を立てて人類へ啓典を授け、この主の存在を認知する意識を呼び覚まそうとされました、しかし、神は人に意志の自由をお与えになったため、人は主を認識するこの生来の意識を抑え込むことが出来てしまうのです。ですが、神はクルアーンの中で仰っています。主を信じよとの内なる呼びかけに答える者は、主がお導きになると。そして主を信じようとする心を打ち消すことを選んだ者は、道に迷わせると。これが、人の創造における神の御計画なのです。[33]

クルアーンは人類に下された最後の啓示であり、クルアーン自体が神の存在を示す印なのです。第4章82節にこうあります。

かれらはクルアーンを、よく考えてみないのであろうか。もしそれがアッラー以外のものから出たとすれば、かれらはその中にきっと多くの矛盾を見出すであろう。

クルアーンを客観的かつ公平に研究したところ、人の手で書かれ得たはずがないことが明らかにわかっています（本書7.を参照）。クルアーンは神の存在を裏打ちする動かぬ証拠なのです。

神は人を永遠の神聖なる目的のためにお創りになり、その創造物の中で最も恩恵をかけてくださってきました。[34]地上での人生はかりそめの生で、来世での永遠の住処に備えることなのです。その準備として、創造主への信仰が試されます。それは成功しているときも逆境に見舞われているときも同じです。また、与えられた自由意志をいかに行使するかによ

っても試されており、この自由意志の試練こそ、善と悪の両方が人の人生に関わってくる部分なのです。人が悪を犯すのであり、神ではありません。それでも、このことの良い面は、悪や苦難は信仰の試練であるだけでなく、警告と抑止でもあるということです。逆境の時にこそ、より崇高な目的についてじっくり考え追求しようとする気持ちが、人の内なる意識の中に呼び起こされるものです。

日食は、太陽が地球と月の間の距離の400倍離れており、加えて月よりも400倍大きいからこそ起こりうる壮大な現象である。このように正確な比率になっていることから、この美しい光景を作り上げた設計者、つまり創造主がいることは明白である。

イスラーム教における女性の地位

イスラーム教では、男性も女性も創造主の御前に平等な人間であるという確固たる位置づけをしています。男性と女性は生物学的に異なり、それゆえ家族や社会の中で異なる役割を担っています。それぞれの役割は異なっているものの、相互に依存し合う関係にあります。どちらが上、というのはありません。次のクルアーンからの一節（第4章1節）はこの原則を見事にまとめています。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。かれはひとつの魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、両人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。あなたがたはアッラーを畏れなさい。かれの御名においてお互いに頼みごとをする御方であられる。また近親の絆を（尊重しなさい）。本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られる。

この一節の言わんとするところは、女性は男性と本質的には同じで、お互いに権利があり、アッラーは女性、特に母親を特別に尊敬しなさいと仰っているのです。

この高尚な信条に従い、イスラーム教は、女性を単なる男性の奴隷という立場から解放しています。女性の男性への隷属というのは、イスラーム教が誕生した7世紀、世界中に浸透していた悪習でした。イスラーム教は女性をこの悪しき慣習から解放し、男性と宗教的、社会的、経済的にも平等な地位を与えたのです。[35]その結果イスラーム教では、女性は財産権、相続権、教育を受ける権利、働いてお金を稼ぐ権利など、男性の享受するすべての権利を持っています。

一部のムスリム社会で女性が不当な扱いを受けていますが、これはイスラーム教の定めたものではなく文化的慣習であり、イスラーム教はこれに立ち向かうためにもたらされたのです。例えば、強制結婚や女子の教育機会の剥奪は、両方とも一部のムスリム社会で行われている慣習ですが、イスラーム法の下では違法行為にあたります。

過激主義と暴力

過激主義と暴力は世界中のあらゆる宗教にみられる現象で、宗教自体と同じくらい古くからあります。どんな宗教においても、極端で、多くの場合倒錯した信仰の考え方をしている人はいつの時代にもいます。そういった人々により、その極端な宗教イデオロギーと過激思想から多くの戦いが起き、数々の残虐行為が犯されています。この人間にありがちな傾向を抑止するため、イスラーム教では信仰に条件を設け、様々な原則に基づいて人格形成を図っています。その原則とは、意志の自由、人間の尊厳の保障、あらゆる信仰の尊重、命の尊さ、全人類の正当かつ公平な扱いです。

意志の自由とあらゆる信仰の尊重

アッラーは信仰について、信教と意志の自由を人間にお与えになっており、よって、どんな宗教においても信仰を強制することはできません。前述のクルアーンからの引用第2章256節と10章99節（本書10.を参照）に加え、アッラーは第11章118・119節で次のように仰っています。

またあなたの主の御心ならば、かれは人びとを一つのウンマになされたであろう。だがかれらは反目しあっている。あなたの主が慈悲を垂れられる者は別である。かれはそうなるように、かれらを創られた。そして、「われは必ずジンと人間を一緒にして、地獄を満たす。」との主の御言葉は全うされた。

信仰の多様性は人の創造における神の御計画の範疇内であり、このことはあらゆる信仰の人と共存し、彼らに対して寛容でなければならないということを意味しています。

命の尊さ

イスラーム教では、罪のない人を殺すことは罪であり、罪のない人に加えられたあらゆる暴力や不当な扱いは犯罪として咎められます。不当に人を殺すことはイスラーム教では重罪です。アッラーはこのように仰っています。

そのことのためにわれはイスラエルの子孫に対し、掟を定めた。人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである（と定めた）。（クルアーン第*5*章*32*節）

イスラーム教において、戦争は自衛と、攻撃や弾圧に対してのみ許される行為です。[36]だし、これに当てはまる正当な戦いでは、実際攻撃に関与している相手に対して宣戦布告し、罪のない一般市民やその財産には一切手を出さないことになっています。さらに、宣戦布告は正式国家が出し、個人や団体は出せないことになっています。イスラーム教における戦争は、戦闘や捕虜、罪のない人々、財産の対処法についての非常に厳格な規則で規制されているのです。[37]

正当かつ公平な扱い

正当さと公平さの欠如は過激思想・暴力的思想を生み出します。イスラーム教は、信仰に関わらずすべての人に対して正当かつ公平な扱いをするよう命じています。アッラーはクルアーン第60章8節でつぎのように仰っています。

アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。

これらの原則があるイスラーム教において、過激主義と暴力はイスラーム教の信条についての認識不足、宗教に対する過剰な熱意、または宗教以外の動機によってしか起こり得ません。今日世界のあちこちで起きている暴力は、根本的に政治的動機に突き動かされているもので、宗教や宗派とは何ら関係ありません。イスラーム教の名を掲げてはいますが、それはその根底にある動機を隠し、一般大衆の支持を得るためなのです。これらの紛争や暴力の陰には、権力争い、支配、富、欲、確執、さらに外国の軍事侵攻の結果が潜んでいます。イスラームは宗教として、戦争やその他、イスラームの名のもとに世の中で起こっているあらゆる暴力について咎められるところは一切ありません。

イスラーム教における「ジハード」

アラビア語の「ジハード」という言葉は、何かを達成するために「奮闘・努力する」という意味です。イスラーム教においては、「アッラーの道のために奮闘努力する」という意味になります。つまり、精一杯主への奉仕に励むということです。クルアーンの中では何度も、信じる者に対しアッラーのために努力せよと呼びかけています。例えば、第5章35節には次のようにあります。

あなたがた信仰する者よ、アッラーを畏れ自分の義務を果してかれに近づくよう念願し、かれの道のために奮闘努力しなさい。あなたがたは恐らく成功するであろう。

すなわち、信者がアッラーに喜んでいただき、自分の行為を認めていただこうという意図をもって行った行為はすべて「ジハード」になります。崇拝行為、喜捨、自己の欲求の抑制、知識の探求、生計を立てること、家族を養うこと、善を広め悪を許さないなどもジハードにあたるのです。

歴史の本だけでなく現代のメディアでも、「ジハード」という言葉は多くの場合、戦闘や暴力の話題に関連して登場しますが、これは誤りです。アラビア語で「戦う」は「キタル」といい、「ジハード」ではありません。イスラーム教は「ジハード」の名のもとに武力によって広められたとされていますが、これは歴史書に何度も繰り返されている偽造事実の中でも最も突飛なでっち上げです。イスラーム教が世界中に広まったのは、その崇高な信条と価値観のためであり、武力ではありません。キリスト教徒が行った十字軍遠征や異端審問のようなものは、イスラーム教では一度も起きたことはないのです。イスラーム教の辞書には「聖戦」という言葉は存在しません。この言葉が登場したのは、1095年教皇ウルバヌス二世が欧州全土のキリスト教徒に対し、聖地奪還のためムスリムと戦う「聖戦」に参戦せよと布告を出したのが始まりです。しかし、ムスリムは、イスラーム教の歴史の始まりにこそ戦争で戦ったことはありましたが、それらは攻撃や圧制を退け信仰における信教と意志の自由を確保するためでした。ムスリムが戦った戦争は解放戦争であり、改宗を迫る戦争ではありませんでした。ひとつ例を挙げると、ムスリムはインドを何百年にもわたって支配していましたが、その間一度もインドの人々をイスラームに武力によって改宗させようとする組織的活動はなく、今日でもインドはヒンズー教徒が多数派の国です。

「ジハーディスト」や「ジハーディズム」という言葉は最近になってメディアで使われるようになった用語ですが、イスラーム過激派や武装集団とその思想を指しています。これらの言葉は現代人が作った造語であり、イスラーム教では歴史的関係も意味もまったくありません。

イスラーム教は理不尽な暴力を認めません。ムスリムが武力行使することを許されているのは自己防衛と反撃のためだけです。この状況においては、戦闘はジハードとみなされることもありますが、それは自衛や反撃のために奮闘することになるからです。アッラーはクルアーン第2章193節で次のように仰っています。

迫害がなくなって、この教義がアッラーのため（最も有力なもの）になるまでかれらに対して戦え。だがもしかれらが（戦いを）止めたならば、悪を行う者以外に対し、敵意を持つべきではない。

トルコ・イスタンブールの歴史的モスク、スルタン・アフメット・モスク。礼拝の呼びかけがあると、今でも人々はこのモスクの豪奢な赤いカーペットの上で礼拝をする。「ブルー・モスク 」として一般に知られ、アフメット一世の治世下で1609年から1616年にかけて建設された。キュリエ（複合施設）はアフメットの霊廟、マドラサ（神学校）とホスピスからなる。

イスラーム法「シャリーア」

「シャリーア」とは、事細かに定められた「**行動規範**」であり、人の生活全体にわたって神の御意志にかなうよう規制するものです。その法規の内容は基本信条から崇拝行為の仕方、倫理観、社会経済の道徳、罰則まで多岐にわたります。「シャリーア」という言葉は「開かれた道」や「唯一の道」を意味し、イスラーム教においては救済と永遠の成功への道という意味になります。ムスリムであるということはシャリーアに従って生きるということですが、それはシャリーアが神のお授けになった生き方だからです。

イスラーム法シャリーアの基本原則は、クルアーンと預言者のスンナから導き出されています。原則を特例適用したり法律面・宗教面での規定を類推したりすることで、クルアーンやスンナですでに示されていなかった新しい状況へ対応することもあり、そういった特例や類推の前例がシャリーアの法規をさらに詳しく定めています。特例や類推の適用は、宗教学者の意見の一致（イジュマ）をもって行われます。

オマーン・マスカットの最高裁判所

人間の判断だけでは、全人類にとって真に公正公平な行動の在り方は定められません。というのも、人間の判断は自尊心や偏見、傲慢さ、欲求、利己心、感情、短絡的思考、その他もろもろの人間の弱点によりマイナスの影響を受けるからです。人は主に、導きと真に公正公平な行動の在り方を示していただかなければならないのです。そしてそれが、イスラーム法シャリーアなのです。シャリーアは絶対的な**行動規範**であり、その目的とするところは人間の命、尊厳、心、信仰、家族、そして財産を守ることなのです。

シャリーアは、反イスラーム的なレトリックの中で頻繁に引き合いに出されており、女性支配、児童婚、自由の抑制などを肯定しているイスラーム法としてやり玉に挙げられています。このようなレトリックは、シャリーアとは実際どういったものなのか、認識不足から生み出されるものです。シャリーアとは**行動規範**で、諸悪に対する解決策と予防策を示しており、不当にシャリーアのせいにされている悪だけでなく、人類を悩ませるすべての悪に適用されます。例えば、シャリーアか定める法や指針には、男女平等、家族内における親と子どもの権利、貧者・困窮者の権利、戦時における行動と戦争捕虜の人道的扱い、公平な商取引の指針、宗教についての寛容さ、社会マナー、国家政府の在り方などがあります。

こちらはクルアーンの一節からの一例で、商売における公平で平等な行動を定めており、シャリーアの規則もこれに基づいています（クルアーン第26章181～183節）。

أَوْفُوا۟ ٱلْكَيْلَ وَلَا تَكُونُوا۟ مِنَ ٱلْمُخْسِرِينَ ۝

وَزِنُوا۟ بِٱلْقِسْطَاسِ ٱلْمُسْتَقِيمِ ۝

وَلَا تَبْخَسُوا۟ ٱلنَّاسَ أَشْيَآءَهُمْ وَلَا تَعْثَوْا۟ فِى ٱلْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ۝

計量を十分に与え、損をさせてはなりません。正確な秤で計り、他人のものを詐取してはなりません。また迷惑を及ぼす行いをして、地上を退廃させてはなりません。

イスラーム教諸派

預言者の時代とその死後跡を継いだ最初の三代の指導者（カリフ）の時代、ムスリムはひとつのまとまった共同体でした。ですが、意見の対立がなかったわけではなく、統治問題について、特に三代目指導者ウスマーン・イブン・アッファーン（西暦644～656年）の任期中に論争が起きていました。政治的不満から反乱が起こったのは、四代目指導者アリー・イブン・アビー・ターリブ（西暦656～661年）の任期中のことでした。その後続いた紛争・戦争で、ムスリム共同体は3つの派閥に分かれました。すなわち、アリー反対派、アリーとその反対派の間での調停の賛成派、そして最初はアリー擁護派だったのがアリー反対派との調停に反対したグループです。というように、歴史的にみると、ムスリム社会における派閥は本質的には政治的なものなのです。イスラームの歴史における転機となったこの事件以降、政治が立法から分離し始め、数多くのムスリム学者がこの3つのグループの中で生まれました。このムスリム学者達が、この時すでに適用されていたシャリーアの規定の原則や概念を形作っていったのです。その中で、ジャービル・イブン・ザイド（639～709年）、アブー・ハニーファ（699～767年）、ジャーファル・サーディク（702～765年）、マリク（711～795年）、シャーフィイー（767～820年）、そしてイブン・ハンバル（780～855年）といった著名なムスリム法学者が現れました。彼ら学者はイマームと呼ばれ、イマームとは、イスラームの宗教学と法学で傑出した実績を持つ学者に対する敬称です。上に挙げたようなイマーム達が法解釈と法規定の方法論を立ち上げ、信奉者の輪を作ったのです。10世紀になると、これらの偉大な学者らが定めた指針は、確立された「法学派」に発展し、それぞれの学者の判断による指針だけを支持し採用しました。すなわち、ジャービル・イブン・ザイドの学派は「イバーディー派」、アブー・ハニーファの学派は「ハナフィー派」、ジャーファル・サーディクの学派は「シーア派」、マリクの学派は「マーリキ派」、シャーフィイーの学派は「シャーフィイー派」、イブン・ハンバルの学派は「ハンバリー派」として知られるようになりましたが、イマーム本人たちは誰一人として、これらのはっきりと分かれた学派を創るつもりはありませんでした。その後300年の間に、一般のムスリムも特定の学派を支持するようになったり、何か問題があった際に法学的・宗教学的な判断について特定の学派の指針に固執したりするようになりました。

これら「学派」は様々にありますが、ムスリムが一致団結していることは変わりありません。ムスリムを繋げるものは、ひとつの共通の啓典、つまりクルアーンと、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の慣行、スンナです。クルアーンはその啓示から1400年の時を経ても一切の改変も加えられずに今日まで残っています。ムスリムは世界中にいますが、皆、信条と宗教行為で違いはなく、礼拝や巡礼といった宗教儀礼は一体となって行っているのです。

注意しなければならないのは、イスラーム教では宗教を宗派に分けることは禁止されているということです。アッラーはクルアーン第3章103節で次のように仰っています。

あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。

この命令の精神に基づいて、ムスリムの諸学派は何世紀にもわたってひとつの共同体として共存してきました。残念なことに歴史を通じ、そんなムスリムの間にも争いはあり、近年でも数々の争いが起こりましたが、このような争いは宗教自体には一切関係なく、地政学的な問題なのです。

ウマイヤ・モスク。ダマスカスの大モスクとしても知られ、ダマスカス旧市街に位置する。世界最古のモスクのひとつであり、イスラーム教の第四の聖地に数えるムスリムもいる。

イスラーム教における基本的人権

人間はアッラーの創造物の中でも尊厳と名誉を与えられた存在です。アッラーはクルアーン第17章70節で次のように述べられています。

われはアーダムの子孫を重んじて...またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたのである。

この重んじられた地位を尊重し、守るため、イスラーム教は全人類に対し基本的人権を定めています。これには信仰も人種も身分も関係ありません。次に挙げるのはクルアーンに定められたイスラーム教における主な基本的人権の例です。

1. 命の尊さと生きる権利：本書5.で引用した第5章32節に加え、アッラーを次のように仰っています。

   ...困窮するのを恐れて、あなたがたの子女を殺してはならない。...また、アッラーが神聖化された生命を、権利のため以外には殺害してはならない。このようにかれは命じられた。恐らくあなたがたは理解するであろう。（クルアーン第*6*章*151*節）

2. 基本的な生活必需品を得る権利：同じ人間が生活に必要なものを得られるようにするのはムスリムの義務です。

   またかれらの財産には、乞う者や、乞うこともできない困窮者たちの権利があると認識していた。（クルアーン第*51*章*19*節）

   貧しい人を助けたり困窮している人の世話をするのは恩を売るのでも恵まれた者の特権でもありません。これは貧者・困窮者の権利なのです。

3. ありとあらゆる自由を享受する権利

   だがかれは、険しい道を取ろうとはしない。険しい道が何であるかを、あなたに理解させるものは何か。（それは）奴隷

を解放し、（クルアーン第*90*章*11*〜*13*節）

束縛には様々あります。身体的束縛もあれば、経済的隷属、強制労働、性的搾取やその他搾取もこれにあたります。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安あれ）は次のように述べています。

最後の審判の日、私が3種類の人間に対してその罪を訴える。ひとつは、自由民を奴隷とする者である。

イスラーム教は7世紀に奴隷制を廃止していますが、西洋における奴隷制の廃止はなんと19世紀まで行われませんでした。[38]

中国・西安の大清真寺。イスラーム教が中国に渡ったのは7世紀初頭のこと。今日、中国には2000万人以上のムスリムがいる。

4. 全人類の平等：人は皆平等であるとみなされ、神の御前に唯一付けられる優劣は人格の純潔さと高徳さです。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる。（クルアーン第*49*章*13*節）

5. 社会的身分に関係なく、あらゆる社会的・経済的問題において公正公平な裁きを受ける権利

あなたがた信仰する者よ、証言にあたってアッラーのため公正を堅持しなさい。仮令あなたがた自身のため、または両親や近親のため（に不利な場合）でも、また富者でも、貧者であっても（公正であれ）。アッラーは（あなたがたよりも）双方にもっと近いのである。だから私欲に従って、（公正から）逸れてはならない。あなたがたが仮令（証言を）曲げ、または背いても、アッラーはあなたがたの行うことを熟知なされる。（クルアーン第*4*章*135*節）

6. 個人の名誉、尊厳、プライバシーの保護

信仰する者よ、或る者たちに外の者たちを嘲笑させてはならない。それら（嘲笑された方）がかれらよりも優れているかも知れない。女たちにも外の女たちを（嘲笑させては）ならない。その女たちがかの女たちよりも、優れているかも知れない。そして互いに中傷してはならない。また綽名で、罵り合ってはならない。信仰に入った後は、悪を暗示するような呼名はよくない。それでも止めない者は不義の徒である。（クルアーン第*49*章*11*節）

さらに、第49章12節ではアッラーはこうも仰っています。

信仰する者よ、邪推の多くを祓え。本当に邪推は、時には罪である。無用の詮索をしたりまた互いに陰口してはならない。死んだ兄弟の肉を、食べるのを誰が好もうか。あなたがたはそれを忌み嫌うではないか。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは度々赦される方、慈悲深い方であられる。

7. 表現の自由と正しく正当なことを支持するため意見を述べる権利

男の信者も女の信者も、互いに仲間である。かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。. . . (クルアーン第*9*章*71*節)

さらに、第4章148節ではアッラーはこうも仰っています。

アッラーは悪い言葉を、大声で叫ぶのを喜ばれない。だが不当な目にあった者は別である。アッラーは全聴にして全知であられる。

8. 信仰の自由:ムスリムは、イスラーム教の真実に人類をいざなうのは自分達の義務であると信じています。しかし、信仰を強制する権利は誰にもありません。信仰とは、魂から自発的に確信と誠意をもって信じることであるからです。アッラーはクルアーン第2章256節で次のように仰っています。

宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷誤から明らかに(分別)されている。

イスラーム教における信仰の自由はクルアーンで何度も繰り返されし明言されています。[39]

これらのイスラーム教の価値観だけでなくクルアーンや預言者のスンナに定められたことは普遍で世界中どこでも通じるもので、人権と民主主義の本質的要素を成しているのです。

イスラーム教における文化の多様性

イスラーム教では、慣習や人種、言語、衣服、食べ物、芸術、民俗文化など、文化表現について、当然のものとして認識しているだけでなく、アッラーの恩恵の印とも捉えています。一方で、イスラーム教はその教えや信条に反する文化の側面をよしとせず、非難さえしています。

またかれが、諸天と大地を創造なされ、あなたがたの言語と、肌色を様々異なったものとされているのは、かれの印の一つである。本当にその中には、知識ある者への印がある。（クルアーン第*30*章*22*節）

別の一節でも、アッラーはこう仰っています。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる。（クルアーン第*49*章*13*節）

今日では世界もグローバル化し、よく目に付くのがムスリムの間にも目立った違いがあるということです。ムスリムの人種・民族・文化的背景は様々であり、重要となってくるのが、何が文化が何が宗教か区別し、宗教と文化の相互作用の線引きをしてムスリム世界に存在する文化の多様性を理解することです。

イスラーム教はいろんな形で世界中の文化の中に現れていますが、これはなんら驚くべきことではありません。世界共通の普遍な宗教として、イスラーム教は世界の隅々にまで広まっており、急速に社会に浸透していったことで文化の多様性も生まれたのです。そしてこの多様性はすべてイスラーム教の教えの許す範囲内で表現されています。つまり、どの国であろうと、イスラーム教の根幹である信条と義務は、敬虔なムスリム全員に共通するものであるということです。例えば、ムスリムは全員、唯一

の神を信じ、天使を信じ、同じクルアーンを読み、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安あれ）を信じその言行に従い、死後の世界と最後の審判の日に自分の行いについて問われることを信じ、天命を信じています。このイスラーム教の５つの信仰の柱は、世界中どこでもすべてのムスリムについて基本的には同じです。礼拝への呼びかけはオマーンにいようと、インドネシアにいようと、セネガルでも中国でも、まったく同じです。世界中のムスリムがラマダーン月には一緒に断食をし、ハッジという毎年行われる巡礼には共にメッカへ向かいます。イスラーム教には文化の多様性の中にも基本信条と義務に基づいた強い一体感があるということです。

もちろん、宗教というものは文化のない隔絶された空間には存在できません。宗教は常に文化的背景のあるなかで表現されるものです。同時に、文化は大多数の人が信じる道徳観や宗教の教えの支えなくしては、形作られも発展もできません。「つまり、宗教色に染まっていない文化も、文化に根差さない宗教もあり得ない」[40]ということです。ムスリムにとっても非ムスリムにとっても、いつの時代でもどこに行っても直面する大きな問題があります。そのひとつが、不朽普遍のイスラーム教の教えと信条と、その上に覆いかぶさっている場合がよくある文化的な解釈とを見分けることです。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安あれ）でさえ、ムスリムはいずれクルアーンにもスンナにも説明されていない状況に直面するであろうことを予測していました。文化的でも法学的でも何かしら常に新しい状況が発生しており、客観的分析と、知見が深く機微に富んだ法学者の知性ある意見が必要となります。実際、世界中で地域や時代を超えて起こっている新たな問題は預言者（彼にアッラーからの平安あれ）の時代よりももっとずっとたくさん多いだろうと予想でき、どんどん増していく文化の微妙な違いを解釈しそれに対応していくことは、ムスリムが今までずっと取り組んできたことなのです。

ムスリムではない特に西洋出身の学者は、ムスリム社会を理解しようと評価する際、通常２つあるアプローチのうちどちらかひとつを取ります。１つ目のアプローチでは、ムスリムは単一かつ不変の集団とみなされま

す。ムスリムはどこにいようと、地理上の位置も時間も関係なく、同じなのです。[41]このアプローチでは、現代のムスリム世界に存在する明らかな文化の多様性が無視されます。2つ目のアプローチは1つ目と正反対です。イスラーム教をその経典や教えから引き離して考え、人、つまりその信者を中心にして捉えるのです。ムスリムには様々な民族がいるため、異なった「複数のイスラーム教」があると考えます。つまり、トルコのイスラーム教、レバノンのイスラム教、オマーンのイスラム教、インドネシアのイスラーム教、などというようにです。この考え方によると、ひとつの世界としてのイスラーム教はなく、多数の「イスラーム教」の世界があり、イスラーム教を支える状況と同じ数だけイスラーム教があるというのです。[42]このアプローチでは、多文化主義の線が延長され、イスラーム教は国別のアイデンティティーにまでばらばらにされて落とし込まれています。より正確なアプローチは、時と場所ごとのイスラーム教の個別の体験について考えることでしょう。イスラーム教は宗教としてクルアーンと、スンナ（預言者の慣例）を記録したハディースという文面の情報源によって伝えられてきました。文章としてのイスラーム教は変わりませんが、ムスリムは孤立した空間に存在しているわけではありません。特定の時と場所に生きているのです。特定の地理的位置の条件・状況、そしてその時代の問題や課題から、ムスリムがクルアーンとスンナに導きを求める文脈背景が生まれるのです。この場合、「文章」も「文脈」も「器」となり、その中で不変の同じ文章についての新たな理解や深い解釈を通じて個別のイスラーム教の体験が生み出されるのです。[43]

個人レベルでは、1人のムスリムのイスラーム教の体験はその教えについての知識、その理解度、どこまで自分の中で落としこめているか、どこまでその教えを実践しているかによります。同様に、各ムスリム社会のイスラーム教の体験も、その時と地理的位置に根差す要因に左右されます。よって、ムスリムは単一の集団でもなければ、複数の「イスラーム教」が存在するわけでもなく、個人やムスリム社会それぞれの個別のイスラーム教の体験があるのです。これらの体験は必然的に起こるものであり、ムスリム世界に見られる文化の多様性を説明してくれます。この多様

性こそ、実は、イスラーム教が様々な文化に順応しながらその肝要な信条や教えを貫いてきたという優れた柔軟性を持つことの証なのです。ムスリムはこのつりあいを神の御業であり慈悲であると考えています。イスラーム教は非常に文化に寛容で、常に文化をより良いものにしようとしています。残念なことに、一部のムスリムは文化の慣習を自分のイスラーム教のルーツに繋げることを怠っていたり、繋げられていないでいたりします。理由は単なる無知だったり、歴史認識の甘さだったりします。この場合、イスラーム教の精神や教えと真逆にあるような文化的習慣ができてしまい、ゆがんでいたり、他に害をもたらしたりするような慣習がイスラーム教のものだという印象を与えてしまいます。[44]そのような文化的悪習をムスリム社会で経験したという例はたくさんあります。そいうった悪習はイスラーム教に誤って結び付けられていたり、イスラーム教の教えのせいにされていたりし、強制結婚、児童婚、名誉殺人、女児より男児を欲しがること、女性器切除などがあります。これらの慣習はすべてイスラーム教に反するものですが、イスラーム教に関する誤解をさらに悪化させマイナスなイメージを強めてしまっているのです。

勉強会でクルアーンを読誦する幼いムスリム学生。タイ・ナコーンシー タマラートのモスクで。

宗教の大切さ

宗教が大切なのには次の6つの理由があります。

1. 人の価値観や言動を左右するのは、その内なる良心が世間一般の規範と信じているものです。この規範は代々受け継がれる文化によって形作られています。文化的規範は宗教の強い影響を受けており、それはどの宗教にも言えることです。文化的規範や基準なくしては、人はどんな生き方をしたらいいか混乱し、方向性を失い、今日の社会にみられるような空虚や価値観と規範の崩壊につながり、社会だけでなく個人の心の乱れを引き起こします。すなわち、始めから宗教が大切なのは、宗教は信仰を定め、宗教は文化的規範と世界観を定めるからです。社会と人の品格を保証するものと言えるでしょう。

2. 宗教は神に関する唯一の情報源です。神は誰なのか、どういった方なのか。宗教が大切なのは、宗教を否定することは神を否定することに等しいからです。

3. 宗教は人の目に見えないながらも現実として存在するものに関する唯一の情報源です。宗教が、人の魂は永遠であることや、死後の世界のこと、天使のことなどについて教えてくれるのです。つまり、宗教なくしては、人の物理的認識を超越したこういった現実について何も知らないままになってしまうのです。

4. 宗教は人生の目的について教えてくれます。なぜここにいるのか、死んだらどこへ行くのか、この世での選択の結果はどうなるのか。多くの人が絶望しているのは、この人生における目的意識が欠けているからなのです。

5. 宗教は生き方です。生活の模範であり、人の尊厳と安全を守り調和に満ちた幸せな人生を歩めるよう条件を示してくれるのです。宗教は、人生の指針とする道徳と平等な司法制度を定めています。宗教をないがしろにすることこそ人の諸悪の根源なのです。搾取、不正、

抑圧、強欲、差別、腐敗など、枚挙にいとまがありません。宗教は人類全体の利益に必要なのです。

6. 宗教が大切なのは、宗教は来世に向けてどう準備したらいいか教えてくれるからです。本書9.で論じたように、死後の世界は現実として存在し、向かう先に何が待ち受けているかはこの世での選択次第なのです。宗教は創造主が何を求めているか、どんな人生を送ったらよいか、来世で受ける行動の結果はどうなるのか、明確に教えてくれているのです。

宗教のない人生は、人生の目的やより広い視野での存在意義の認識をまったく持たない人生であるだけでなく、来るべき世界について何も分からないままの人生になります。宗教を大したものではないと無視するのは賢明なことではありません。次のクルアーンからの一節も宗教をないがしろにしてはならないと忠告しています（第67章6～12節）。

かれらの主を信じない者には、地獄の懲罰がある。何と悪い帰り所であることよ。かれらがその中に投げ込まれる時、それ（地獄）が沸騰するかのように不気味で忌しい音でうなるのをかれらは聞こう。激しい怒りのために破裂するかのようである。一団がその中に投げ込まれる度に、そこの看守はかれらに、「あなたがたに、警告者はやって来なかったのか。」と問う。かれらは言う。「そうです、確かに一人の警告者がわたしたちの許にやって来ました。だがわたしたちは拒否して言った。『アッラーは何（の啓示）も下されない。あなたがたは、大変な過誤の中にいるだけである。』」かれらはなお言う。「わたしたちが聞き、熟考したならば、烈火の住人の中には入らなかったでしょうに。」かれらは自分の様々な罪を認めた。烈火の住人は、（容赦から）遠く離れている。本当に目に見えない主を、畏れる者には、容赦と偉大な報奨があろう。

ムスリムになるには

イスラームは六信五行に基づいており、その6つの信条の柱と5つの行為については本書2.で説明したとおりです。これらの信条を理解し、受け入れたなら、次の言葉を声に出して言うだけでムスリムになれます。

アシュハドアンラー　イラーハイラッラーワ　アシュハドアンナー　ムハンマダ　ラスールッラー

私はアッラーの他に神はないと宣言します。また、私はムハンマドがアッラーの使徒であることも宣言します。

この宣言はアラビア語でシャハーダと呼ばれ、信仰の証言を意味します。まずアラビア語で宣言し、続けて入信者の話す言語で宣言します。

シャハーダを宣言した人はムスリムとなり、その後はイスラーム教の六信五行に専心します。

ムスリムでない人がイスラーム教に入信する場合、「生来の宗教」に改宗するということになります。人は皆、生まれはムスリムだからです。つまり、生まれた時は、人は誰しもアッラーの御意志に完全に帰服しており、基本的な道徳観の意識（フィトラ）を持って生まれてくるからです。成長するにつれ、両親や周りの文化の影響で特定の宗教を信仰するようになるのです。つまり、真実を追求し、信仰と宗教について論理的で道理にかなったものを見つけるかどうかは個人任せということです。

信仰の真実

1. 生まれに応じた盲信、先祖のやっていたとおりにすることは信仰ではありません。
2. 真の信仰は知識と根拠、論理に基づいていなければなりません。
3. 信仰を持つ根拠は確固とした証拠で支えられていなければなりません。

注： イスラーム教において、信仰と論理は互いに相いれない存在ではありません。論理的思考を使って信仰を証明し強化する必要があるのです。

用語集

アッラー： 創造主、世界の主の人格名。(3.を参照)

アーヤ： クルアーンの節。また、「神の印」。

カリフ： ムスリム社会の指導者。「カリーファ」に由来し、「行政の代理人」という意味もある。

ハディース： ハディースとスンナはそれぞれ預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安あれ）の言行と生活の模範である。預言者の教えの根幹を成し、その教えは「預言者のスンナ」と呼ばれる。(8.を参照)

ハッジ： ムスリムが毎年行うメッカへの巡礼。(2.を参照)

ヒジュラ： ムスリムがメッカからメディナに移住したこと。西暦622年に行われ、ムスリムの使うヒジュラ暦と呼ばれる太陰暦の元旦にあたる。(4.を参照)

イバーディー派： イスラーム教法学派のひとつ。(18.を参照)

イスラーム： 創造主アッラーが唯一絶対の存在であることを信じ、その意思に絶対帰依することを信条とする宗教のこと。(2.を参照)

ジハード： アッラーのために奮闘努力すること。信者がアッラーの御満悦と嘉賞を得ようとする意図をもって行った行為はすべてジハードである。(16.を参照)

カーバ神殿： 唯一絶対の神を崇拝するために地上に建てられた最初の建物。メッカの大モスクの敷地内にあり、普段は黒い布で覆われている。

メディナ： サウジアラビアの都市で、メッカの約400km北に位置する。イスラーム教における第二の聖地、預言者モスク（マスジド・アル・ナバウィ　）がある。

メッカ： サウジアラビア西部に位置する都市。カーバ神殿とイスラーム教の第一の聖地、聖モスク（マスジド・アル・ハラーム）がある。

ムスリム： イスラーム教の信条を信奉する人。

キブラ： メッカの方角で、ムスリムが礼拝の際に向く方向 。

クルアーン： 神の最後の御言葉で、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの平安あれ）に啓示された。（6.を参照）

シャリーア： イスラーム教における行動規範で、基本信条や崇拝の方法、倫理、社会経済の道徳、罰則を定める。（17.を参照）

シーア派： イスラーム教法学派のひとつ。（18.を参照）

スンニ派： イスラーム教法学派のひとつ。（18.を参照）

スーラ： クルアーンの章。

ウンマ： ムスリム世界におけるムスリム共同体全体のこと 。

注釈

1. 預言者の名を述べる際、ムスリムは必ず「彼/彼女にアッラーからの祝福と平安あれ」とアッラーに祈る。（クルアーン第33章56節、37章181節も参照）

2. クルアーン第2章132節、136節、22章78節

3. 六信についてはクルアーンの中で何度も触れている。例：2章3～4節、2章285節、4章136節、54章49節等

4. クルアーンに明言されているように、人の行動は神に定められているものではない。例：4章62節、10章44節、13章11節、18章29節、30章41節等

5. 五行についてはクルアーンの中で何度も触れている。例：2章3節、2章43節、2章183節、2章196節、3章97節、22章78節等

6. タクワという言葉は、畏れること、守ることを意味しアッラーの怒りから己を守り、アッラーの存在を畏れ意識することを意味する。この神に対する畏怖の念こそが、深い信仰と正しい道に進み、善行を行い悪を避けるための力となる。

7. クルアーン第7章158節、21章107節、33章40節、34章28節

8. 一族の長にと預言者を誘ったのは、メッカの有力者のひとり、ウトバ・イブン・ラビーア（ブー・スフヤーンの義父）であった。

9. クルアーン第29章50～51節

10. A.　ユースフ・アリ（1975）『聖クルアーン　訳解説』イスラミック・ファウンデーション（ロンドン）。第7章157節についての解説。

11. クルアーン第3章3節、4章47節、5章48節、15章9節、26章192～196節、76章23節等

12. 人のアッラーとその他万物との関係はクルアーンの中で何度も明言されている。例：1章2節、2章21〜22節、2章257節、7章54節、50章21節、82章10〜12節、18章50節、6章112節、12章5節、6章38節、2章164節、31章10節、36章71〜73節等

13. クルアーン第2章38〜39節、2章81〜82節、17章9〜10節等

14. クルアーン第3章137節、10章71〜73節、11章25〜49節、12章1〜113節、17章2〜8節、71章1〜28節等

15. エル＝ナッガール『クルアーンにおける山の地質学的概念』P.5

16. このテーマに関する参考文献：①ザキール・ナイク博士『クルアーンと現代科学』、②モーリス・ブカイユ『聖書とクルアーンと科学』、③サネール・タスラマン『クルアーン：覆しようのない奇跡』エンデル・ギュロル訳

17. クルアーン第2章34節、17章61節

18. クルアーン第14章44〜46節、74章8〜10節、80章33〜46節

19. クルアーン第13章22〜23節、36章55〜56節、52章21節

20. クルアーン第5章48節、16章36節、10章47節

21. クルアーン第3章64〜65、3章98〜100節、4章47節等

22. クルアーン第2章75節、2章79節、2章146節、159節、174節、3章71節、4章46節、5章13節、および5章15節。キリスト教徒の聖書学者もこの事実を認めている。例：①バート・D.アーマン『捏造された聖書』および『キリスト教成立の謎を解く―改竄された新約聖書』

23. クルアーン第5章48節

24. クルアーン第11章118〜119節

25. クルアーン第3章59節、4章171節、5章75節、5章116〜117節、19章30節

26. 聖書（ジェームズ王欽定訳）マタイによる福音書第24章63節、ヨハネによる福音書第5章30節、14章28節、17章3節および20章17節、使徒言行録第2章22節。このテーマに関する参考文献： http://www.islam-guide.com/ch3-10-1.htmおよびローレンス・ブラウン博士『最初で最後の聖書』

27. クルアーン第3章45節、4章171節、5章72節、19章30節

28. クルアーン第19章27〜33章および同第3章49節、5章110節

29. クルアーン第5章110節および57章27節

30. 訳版を問わず、聖書はイエス（彼にアッラーからの平安あれ）は「イスラエルの子孫」に遣わされたという事実を認めている。例：聖書（ジェームズ王欽定訳）マタイによる福音書第10章5〜6節、および同第15章22〜26節

31. 科学者の中で、サー・アントニー・フリューは断固とした無神論者であったが、2004年、神を信じると宣言し、2007年には『神は存在する：世界一悪評高い無神論者が考えを変えた理由』と題した本を著している。

32. クルアーン第7章172節および30章30節

33. クルアーン第3章86節、10章9節、13章27節、17章97節、18章17節、48章4節、74章31節

34. クルアーン第17章70節、23章115節、29章2節、30章8節

35. 歴史を通じて女性を苦しめてきた不当な扱いには次のような例がある。①イスラーム教以前のアラブ世界では生まれた赤子が女の子だと生き埋めにされた。②古代ローマでは女性は奴隷と同じとみなされ、ギリシャでは女性は所有物として扱わ

れた。③フランスにて西暦587年に開かれた会議で、女性は人間かどうかが定められた。④1850年以前、女性は英国市民ではないとみなされており、1882年になるまで人権を与えられなかった。⑤中国では、男は自分の妻を売るだけでなく、生き埋めにすることすら許されていた。⑥ヒンズー教徒は女性を死や地獄、毒、火よりも辛い苦難と捉えていた。

36. クルアーン第2章190節、2章193節、2章217節、4章75節、および8章39節

37. クルアーン第8章67～70節。第8章と9章の大部分に加え他の章も、戦争を起こす状況、戦争における行動規範、戦争中の休戦協定に関する規定、難民の扱い、戦利品の管理、戦争捕虜の扱いについて割かれている。注目すべきは、ムスリムが史上初めて戦争捕虜の扱いに関する法を導入したということである。

38. 奴隷制廃絶の流れ：http://en.wikipedia.org/wiki/Abolition_of_slavery_timeline

39. クルアーン第10章99節、109章1～6節等

40. 参考資料VI、P.183

41. 参考資料VII、P.4

42. 参考資料VII、P.4

43. 参考資料VIII、P.110～114

44. 参考資料VIII、P.116～118

参考資料

I. A. ユースフ・アリ（1975）『聖クルアーン　訳解説』イスラミック・ファウンデーション（ロンドン）

II. サイード・アブドゥル・アラ・マウドゥーディー（1992）『クルアーンを理解するために』イスラミック・ファウンデーション（ロンドン）

III. ザキール・ナイク博士（2008）『クルアーンと現代科学：対立か和解か』イスラミック・リサーチ・ファウンデーション（インド・ムンバイ）

IV. アハマド・フォン・デンファー（1983）『ウルム・アル・クルアーン：クルアーンの科学概論』イスラミック・ファウンデーション（ロンドン）

V. ヴェド・プラカシュ・ウパッダイ博士（2007）『ヒンズー教典におけるムハンマド』A.S. ヌールディーン（マレーシア）

VI. タリク・ラマダーン（2009）『抜本改革：イスラーム教の倫理と解放』オックスフォード大学出版局（オックスフォード）

VII. クリントン・ベネット（2005）『ムスリムと現代性：課題と議論概論』コンティニュアム（ニューヨーク）

VIII. メフメト・オザルプ（2012）『伝統と現代性のはざまに生きるイスラーム』バートンブックス（オーストラリア）

「アッラフマーン」最も慈悲あまねくお方。アッラーの属性のひとつ。

注

تعريف الإسلام باللغة اليابانية

非売品